めざせ
エリトピア!

めざせ、ユリトピア！

目次

テーマ“星”

リスイユウキ …2
相葉式 …3
御厨みくり …5
サファイ …11
やまだ（仮） …12
人間無骨 …14
哲仁 …17
はろはろ …18
北条KOZ …19

テーマ“Z”

眼鉄太一 …20
椎名かじん …24
九日 …26
セフ …28
アティス …29
千歳 …31
みちよん …35
DS …36

テーマ“嘘”

ユリカモメ（仮） …44
悠季 …52
佳賀梨夏琉 …53
環月紙袋 …57
橘 …59
都塚 ムラサキ …67
みずぐちさとこ …68
九夏
れおなるど …69
西UKO …75

テーマ“料理”

あんかけ てけ …76

テーマ“祭”

にんじん …77
ガスリー …81

アンケート結果 …87
執筆者コメント …90

リスイユウキ

晴れてよかったな
数十年に一度の流星群だもん
しっかりとお願いしなきゃね！

願いごとふたつ
相葉 式

羽美はもう願いごと決まってるんだろうな？
もちろん！
短くまとめたか？
ん…なんで？

長くしたら絶対噛むだろ
噛むね～
ええっ、ひどい！

部長になってからのわたししっかりしてるじゃん！
…
ほら つっこんだぞぉ
ホだよ めんどい
ふたりともなんか言ってよ！
ん…あー

それじゃ言ってみな、チェックしてやるよ
わかった！沙紗も一緒にね
なんでだよ！
どうせふたりともラブラブな願いなんだろ
とんだお邪魔虫だね

いいからさ、せーので言おう！
…はいはいわかったよ
せーの

音七が幸せになりますように！ゆっくり寝れるように
？
は？
キョトン
何言ってんのさ二人とももっと他に願うことがあるでしょ～
だ、だってわたしたちはさ、音七のおかげで付き合えて今すごい幸せだから
……あたしもすごい音七に感謝してるし、その、上手く言えないけどさ
！
余計なお世話だよ
あたしゃあんたら二人が幸せなら幸せだしゆっくり寝れるさ～
ぽあぁ
ぎゅ
やっぱりわたしたちって最高の三人だよね！

遠い存在

御厨みくり

私にとって、美紀さんは星だった？
いや、そんなことは、ないと思うけど。

「美紀さん、今週末も忙しいんですか？」
『……ごめんね。大学のほうの、課題が結構あって……』
「そう……ですか」
私は部屋で電話をしながら、カーテンを開けて外を見る。満天の星空。現在、大好きな人に週末のデートを断られている私からしたら、慰めにも何にもならない。
美紀さんは私の恋人。去年出会って……、付き合って……。そうして私を置いて卒業してしまった。美紀さんは大学に進学して一人暮らしをしている。けれど、そこまでは遠くなくて、電車で一時間くらい。電車の本数が少ないから一人暮らしになったけど、お互い行き来できる距離ではある。
だから、卒業してしまうと会える回数が少なくなるのはわかっていたけど、私は美紀さんの一人暮らしを少し楽しみにもしていた。だって、これで美紀さんの家に堂々とお泊り出来る！　今までも少しは出来たけど、やっぱり親の目もあるし、美紀さんは受験生だったし、とにかく、ようやく、これで！！　……と、そう思っていたのに。学校が始まってみると美紀さんは「忙しい」と口にすることが多くなって……。四月中旬、今に至る。
『ごめんね、GWにはちゃんと時間取るから……』
「それは嬉しいですが……、遠いです」
美紀さんが卒業するまで、私たちは毎日一緒に居たも同然だから、私は美紀さん離れが出来てないみたい。
「美紀さんは、寂しくないですか？」
『そりゃあ、寂しいわ。聖苗がいないって……、こんなに寂しかったのねって、毎日思ってる』
「美紀さん……」
胸が、ちょっとだけ温かくなる。美紀さんも同じ気持ちで居てくれるのが、やっぱり嬉しい。
「あの、邪魔しないから……行っちゃだめですか？」
『聖苗……』
「課題とかですよね？　私も宿題してますし、えっと……」
『ごめんなさい。私もそうできたらいいんだけど、大学の、構内でやらなきゃいけないことだから……』
「そうですか……」
わかっていたことだけど、仕方ない。まだ、生活が落ち着いてないし、大変なんだと思うから。
「今は、電話だけで我慢します」
そう言って、美紀さんとお話をして……。遅くなってから電話を切る。これが最近の私の日課だ。
「遠い……なあ……」

星みたいに？　それは大袈裟だけど。心だけは近くにあるかな？
それも、今はちょっと、心配。
美紀さんは私の学校で「聖女」と呼ばれていた。整備委員として、仕事をなんでもこなしてくれる……、平たく言えば便利屋さん。聖女として遠い存在にされて……、やらなくてもいいことまで押し付けられて……。けれど、美紀さんはちゃんと変わった。断るときは断って、私と一緒にいるのを優先してくれたりとか、そうなったとき、私は美紀さんをすごく近くに感じた。
「美紀さんに……会いたい」
流れ星を探してしまう。願いが叶うなら……、早く大人になりたい。

†

「ああ……どうしよう……」
罪悪感だけが積もっていく。私は今日も、聖苗に嘘をついてしまった。
聖苗は私の後輩に当たる子で、私の恋人だ。去年付き合い始めて、今は遠距離恋愛をしている。聖苗は優しくて正義感の強い子で、だから……。
今の私の現状を見たら、きっと幻滅されてしまうと思う。
たくさんの課題……。私の入った大学は、すごく課題が多い。テストよりは、レポートで点数が加算されていく科目が多くて、出さないと点数が下がって行ってしまう。
けれど、大変ながらもみんなこの量をこなしている。けれど……、私は鞄に入っているファイルを見る。
「……三人……分……」
きっかけは、些細なことだった。同じ授業を取っている女の子たちに頼まれたのだ。最初は、代返だった。出られない授業に、出ていることにしてほしいと。授業が終わってから、名前を書いた紙を出すだけ、それだけのこと……。『どうしても』と頼まれて、私はＯＫしてしまった。
けれど、次の日にその授業で課題が出たことを伝えると、彼女たちの態度は一変した。
「どうしよう、私たち授業出てないし、課題なんてできないよ」
「あの……ノートなら取ってるし、私が教えるから……」
私はそう言ったけれど、彼女たちは渋い顔をしていた。多分、面倒くさいと、思ったんだと思う。
「ねえ、相原さん。課題、私たちの分もやってくれない？」
「え……？」
「お願い。今回だけだからさ。私たち、まだ入学したばかりだし、課題、出しときたいんだよねぇ」
「あの……でも、自分でやらないとダメだと……」
「いいじゃない、ネットからコピペして、ちょっと変えてさ。それだけじゃん」
「そんな……」
嫌だと、言えば良かったのに。私は、それを言い出せなくて、引き受けてしまった。それからも度々。簡単そうな課題のときは、私に押し付けられる。私は名前を書き替えて、内容を少しずつ変えて、彼女

たちに渡す。
「ありがとー」
軽いお礼だけを、返されるだけで。
こんなのだめだって、わかってるのに。入学したばかりの私には、まだ友達も少なくて……、誰にも相談できなくて。頭ではわかっていても、実行に移せない。
怖い。
でも、聖苗に知られるのはもっと怖い。
嫌われるのは、もっとずっと、怖い。

†

「相原先輩に、会えてない？」
「そうなの」
私は美紀さんのことを、同じクラスの狛野比奈に相談してみた。比奈とは去年からずっと同じクラスで、それから、比奈も先輩と付き合ってる。元々仲は良かったけど、お互いそのことを知って、お互い親密度は増した感じ。恋愛中に困った時とか、そういうのがあるとよく相談している。
「うーん……」比奈はちょっと悩んだようにしてから、思いついたように言い出す。「相原先輩が、浮気は、ない」
「わかってるよぉ！」
美紀さんが浮気なんて……、そんなことは考えたこともなかった。で、でも……、浮気……。
「もしかして……流されるがままに……！？」
「……ちょっと、ありえる」
「否定してよぉ！」
最初は抵抗してたのに、そういうことになっちゃって……、私に見つかる前に別れないとと思ってるとかっ。いや、美紀さんに限ってそんなことはないと信じたいけど！
「本当に、忙しくて大変なのかも」
「私だってそう信じたいけど……、でも、おかしくない？　行くのもだめだって」
「……確かに。家にいるだけなら、そこまで大変なことじゃないかも」
「そうだよねっ！」
美紀さんが大学に行ってる間、私は家でお料理を作ってたっていい。大学構内に学生証を持ってる人しか入れなくたって、出来ることはなんでもある気がする。
「それか、聖苗、何かした？」
「……思いつかないんだけど……、そういうことなのかな」
美紀さんは確かに、嫌だと思っていても直接言えないかもしれない。本当に、今は私に会いたくない？　私がいないと寂しいって言ってくれたのは、嘘？
「比奈ならどうする？　先輩が何か悩んでるみたいで……、でも、話してくれなかったら」
「……前は、待ってた、かな」
「待ってた……か」
比奈らしいかも。話してくれるのを、待ってる。口数の多い子じゃ

ないからこそ、異変にはすぐに気付く。
「でも、今は、聞いちゃう、かも」
「……そっか」
「前は、『隣に住んでる、先輩』だったけど、今は、恋人、だから」
「……うん」
「悩んでるの、見たら、きっとすごくね、胸が苦しくなる」
「……そうだね」
大好きな人なら、そうなったって、おかしくないよね。だってこんなに、愛しいんだから。
待ってなんかいられない。遠い場所に居たって、走って会いに行く。
「……決めた？」
「うんっ、私、美紀さんに会ってくる！」
悩んでいても仕方ない。ちゃんと、会って来よう。そうじゃないと、答えなんて出ないから。

†

「えっと、来ちゃいました……」
チャイムがなって、玄関を開けると、そこに私の恋人が立っていた。小さくて可愛い……私の恋人、聖苗。
「聖苗……どうして……」
「あの……、だめ、でしたか？　どうしても、会いたくて……」
ちょうど、人のレポートをやっていたところだった。だからこそ、今聖苗に部屋に入られては困る。けれど、そんなことより……。
「……聖苗……」
自然と、口元から笑みがこぼれる。ああ……、嬉しい。大好きな聖苗がすぐ傍にいる。
「ちょっと待っていて。すぐ、片付けるから」
「大丈夫ですか？」
「ええ。ちょっとだけ待っていて」
私はテーブルの上に広げていたレポートをファイルにしまう。部屋中を見渡す。大丈夫、見られて困るものは他にない。
「聖苗……！」
聖苗を部屋に招き入れて、ぎゅっと抱きしめる。懐かしい、聖苗の匂い。小さな体……そのぬくもりも、全部全部、愛しい。
「美紀さん……、課題とか、大丈夫なんですか？」
「ええ。だって……せっかく会えたんだもの。遠くなかった？　知らない人に声掛けられたりしなかった？」
「大丈夫ですよ。でも、家にいらっしゃって良かったです。大学、行かなくて大丈夫なんですか？」
「あ……」そういえば、聖苗には大学で作業すると言っていた。「これから行くつもりだったんだけど……、聖苗が来てくれたから、明日にするわ」
「いいんですか？」
「ええ」
少しだけ……レポートのことを考える。明日一日で終わるかどうか不安ではあるけれど、でも今は……。
「もう少し、こうしていていい？　聖苗に会えなくて、ずっと寂しか

ったから……」
「はい……。私もです、美紀さん……」
あったかい。落ち着く。一人じゃないんだと、やっと実感する。私にはこんなに可愛くて大事な恋人がいるのに……、ずっと心は落ち着かないままだった。
だからこそ……、聖苗を失いたくない。あんなこと……知られたら……。
「……美紀さん？」
「聖苗、大好き」
ぎゅっと抱きしめて、そのまま床に転がる。お互いに何も言い出すことなく、唇を重ねた。

聖苗は今日は泊まっていくことになった。嬉しいという気持ちの反面、少しだけ怖くなる。聖苗が寝てから……少しだけ、課題をやったほうがいいかもしれない。このままじゃ、間に合わないかもしれない。
こんなこと、早く終わりにしなくちゃ。やっぱり私は聖苗が大好きで……、聖苗が一番だから。だからこそ、聖苗と一緒にいる時間が短くなるなんて耐えられない。何もかも失っても、誰になんて言われても、やっぱり。
けれど……、ちゃんと言えるだろうか？　それを考えると、すごく不安になる。自信がない。彼女たちを前にしたら……声が震えてしまいそうで……。
「美紀さん」
机の前で立ち尽くしたままだった私に、聖苗が声を掛けてくれる。
「美紀さん、大学でどういう勉強してるんですか？　お話、してほしいです」
「いいわ。ちょっと待ってね」
「あ、これ、さっきまで美紀さんが書いてたレポートですか？」
聖苗はそう言って、レポートの入ったファイルに手をかける。
「だめ！」
だめ……、その中には……！
「あっ……」
聖苗から取り上げようと思ったファイルは、聖苗の手から落ち、床に落ちる。中に入っていたレポート用紙が、部屋中に散らばる。
「すいませんっ」
「あ……」
聖苗はすぐにかがみこみ、散らばった紙を拾ってくれる。
「……美紀さん……」
気付かないで。お願い、知らない振りを、して……。
「これ……、誰の、レポートですか？」
聖苗は、レポートの一番上に書かれた名前を指さしていた。
「それは……友達の……間違って持ってきちゃって」
「でも、これ、書きかけですよね？　お友達、困りませんか？」
「……それは……」
「じゃあ、これは？」
そっちは、ほとんど書き終わったレポート……。それにも、私のではない名前が書いてある。私と、同じ字体で。
「……美紀さん。これを、書いてたんですか？」

私の瞳から、涙が零れる。肯定なんて、出来ない。私が悪いってわかってても……、聖苗を失いたくない。

「……この人、どこにいますか？　美紀さんにこんなことさせて……！」

「違うっ。違うの……」自分が情けない。情けなくて、涙が止まらない。「聖苗が、怒らなきゃいけないのは、私に対してでしょう……？　私、また同じこと、繰り返して……」

「……美紀さん……」

「怖かった。聖苗のいないこの場所が……、聖苗も、友達も、誰もいなくて……孤独で……、私、元の私に戻っちゃった……」

そんな、言い訳。そうやって、聖苗を繋ぎ止めようとして。

「……遠く、ないです。遠くないですよ、美紀さん」

「聖苗……」

「私は、どこに居たって、美紀さんの傍に居ます。だから、一人で抱え込まないで……」

「聖苗……！」

私にはもったいないくらい、素敵な恋人で。私にはもったいないくらい優しくて。だけど、だからこそ、私は……。

「……聖苗の、傍に居たい……。傍に居られる、私でありたい……」

ちゃんと、終わらせよう。こんなことがもう二度と、ないように。怖かっただなんて言い訳を、することがないように。

「美紀さん……、私、なんでもしますよ？」

「いいの……。私が自分で、しなきゃいけなことだから……」

ぎゅっと聖苗を抱きしめて、もう少しだけ涙を流す。この場所に居ても、聖苗のぬくもりを忘れないように。一人じゃないことを、忘れないように。

「美紀さん、私……美紀さんが、星みたいに遠く感じて」

「そんな存在じゃないわ。輝けもしない。私なんて……ちっぽけで」

「でも……私にとっては、世界で一番輝いてるように見えます。どこにいても、私は美紀さんを探して、美紀さんを見つけたくて……」

「聖苗……」

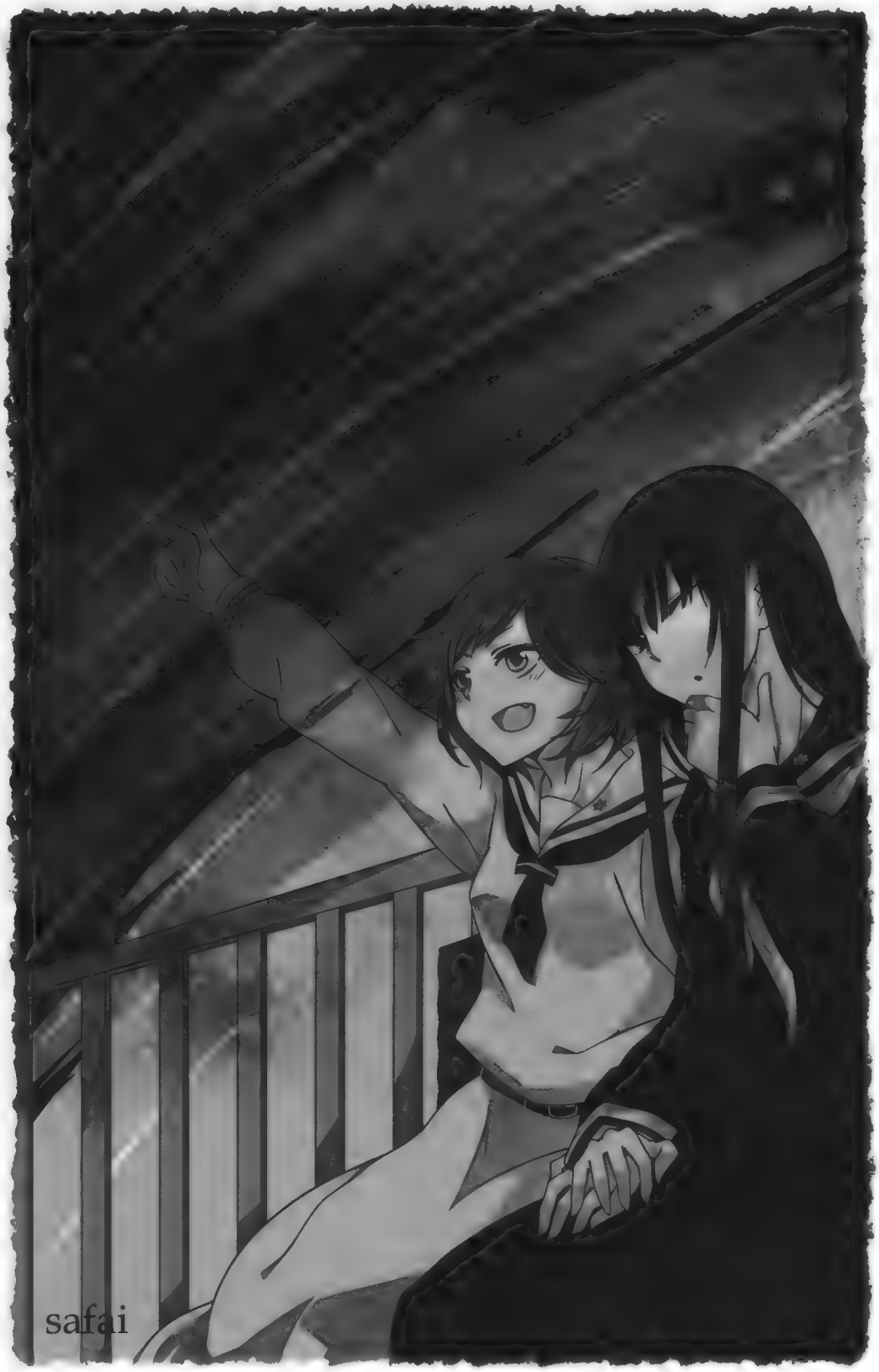
大学生活も、一人暮らしも、まだ始まったばかり。けれど、離れていて辛いことよりもずっと、楽しいことだってある。例えば今日だって……聖苗が家に泊まってくれる。今までよりずっと、傍に居られる。

「美紀さん、今日は、よろしくお願いします」

聖苗が私の腕の中で、小さく微笑んだ。

「今日は……じゃないわ。これからも、ずっと」

これからもずっと……、貴女は私の大事な恋人だから。


safai

沙紗ー
音七ー
お待たせー…
あ……
KiraKira
やまだ(5反)
すーすー
沙紗まで…
珍しいなぁ
沙紗の肩…
いいなぁ…
あ

…沙紗の睫毛キラキラしてる
新しいマスカラ？
…なんだか星が瞬いてるみたい…
…沙紗
な
なんだこれ…なんなんだこれ…!?
ちゅー
END

ハネムーンにはまだ早い

人間無骨

もうすっかり夜だってのに、空では月がワンマンライブ中だってのに、オレは胸に太陽を抱えている。

ああ、でも太陽だとアツすぎて持ってらんねぇか。どんな言葉だとシックリくるかな？　ええと、うぅん。そうだ、フロ、だ。フロにはいっているような感じが近い。じゃぶぅんとおフロに入った時の、一息つく時のカンカクをもっとパワーアップさせたような。思い切りハッピーにしたような。

――つまり、ロックなんだ。コイビトと同じフトンで寝るってことは。

「……重くないか？」

「うんにゃ、ヘーキだべ」

オレのシャツに埋まった愛来が、頭を動かす。確かに、愛来はオレをマクラにしてる格好だけど、そんなことは全然ヘーキだ。ちょうどイイところにある愛来の頭を撫でてみると愛来は気持ちよさそうにじゃれてきて、それがとてもキュートに感じた。愛来はいつもソーダーバーみたいにクールでハードなのに、時々バニラミルクより甘ったるくなる。その振れ幅に、オレはクラクラきてしまうのさ。

ドーキンするまでの間は、オフクロにも妹にもオレにもいつも通りクールだったし、そのままナニゴトもなくおやすみなさいかと思っていたら、電灯を消した途端、急に愛来はオレのフトンの中に潜りこんできた。心底楽しそうな顔をするだけで、コッチに来る理由やら考えやらを愛来は口に出さなかった。

きっと愛来は『そうしたいからした』だけなんだろうとオレは考える。だからオレも、愛来がくっ付いてきたことにちっとも驚かず、アタリマエのように抱きしめる。オレも愛来にそうしたかったから。

腕の中で、体の上で、愛来が覆いかぶさるように体勢を変えた。そのまま顔が近づけられて、ホッペ同士がくっ付き合う。

うはぁ、すべすべ。暗いせいなのか、フダンよりはっきりそう感じる。オレが毎日使ってるシャンプーの匂いが。照れくさいほどどきどきする。オレも同じヤツを使っているとは思えない。きっと愛来とマイシャンプーの組み合わせがものすごいケミカルな奇跡を引き起こしたんだろう。愛来ならあり得る。なんてたって、カミサマだからな。

「……くすぐったいぜ」

オレの声を聞いた愛来は、楽しげにくつくつ笑った。

ホッペが離れ、『お？』と思うヒマもなく、また別の柔らかさが。これはクチビルだな、ギターを賭けたっていい。何度も何回も何遍も触れられたことがあるから、愛来のクチビルだけは、たとえニセモノが星の数ほどあったってオレには分かる。

首スジだとか、サコツだとか、マブタだとか、オレのクチビル以外のあらゆる場所に降ってくる。バリエーション豊かにキスされながら、オレは愛来と指と指を絡めるやり方で手を繋ぐ。

触れた手首にはゴツゴツした腕時計がなくて、それがグッドだった。時間を身に着けていない愛来に触れることは、オレの中でトッケン的なもので、誰かに自慢してやりたいぐらいなんだ。『へへぇ、オマエラは腕時計をした愛来しか知らないんだなー？』ってね。愛来はいつもアレを着けていて、外す時はメッタにないからな。

黙ったまんまでしばらくいちゃついていたら、オレのベロをチロリと舐めた後、愛来はそれきりくちづけをストップして、オレの真横に収まってしまった。オレはスデに準備オッケーなのに、動きが無い。

「ふぅ……じゃあ、おやすみ陽香」

「おお……？」

えッ？　ひょっとして、もうオワリなのか？　いやいやいやいや、こんなのイントロだけじゃねぇーか。機材トラブルでライブが中断したみたいだべ？　観客からヤジが飛んでくるべ？

「どーしたんだ？」

「ん？」
「つ、続きは……」
レーセーに考えてみるとかなりクレイジーなことを言っている気がする。オレがしてることって、オネダリだよな。シューチプレーってヤツだよな。
「私は、このまま眠るつもりでいたよ」
「マジか・……ッ」
なってこった！
続きなんてないことを、愛来はあっさりと言ってのけた。ショックを受けた仕草は隠すつもりでいたけれど、バッチリ伝わってしまったらしく、愛来はキリリとした眉をひそめた。
「……やはり、陽香は私のことをそんな風に見ていたんだな」
否定、出来ない。こういう時の愛来は、いつも、最後まで、オレを。
その声にはシアンするような鈍さを含んでいて、怒ったり悲しんでいるようには見えなかった。けれどオレは自分があり得ないくらいカッコ悪く思えてベソをかきそうになる。イロメガネで愛来を見るなんて、まるでロックじゃねぇ。
「それはその……ゴメン……」
「いいんだ。構わないよ陽香。私も自覚はしていたから。陽香の口からそんなことを聞くとは思いもしなかったが」
構わないと言ってくれたことはハッピーだが、ケッキョクなんでそんなつもりがないのか、オレにはまだわからない。理由が、なにかしら原因があって、愛来は眠ろうとしている。そのワケを、考えてみると、どれもこれもオレが悪いからだと思えてきて、一度は引っ込んだ涙が、アンコールされそうになった。
「ま、まさかオレがジョーズに出来ないから！？」
ヨソーされた候補の中で、トップに挙げられたものを、オレは投げかけた。
スキンシップはいいけど、その続きは無理――つまり、愛来はオレとしたくないってコトだ。
脳ミソを引っ繰り返して昔の記憶を掘り返してみると、確かにオレはそういうことはちっともベンキョーしてなかったし、いざトぶ時だって、おっかなびっくりすることぐらいしか出来てない。
そういや、マナも酔った時に『相手があまりにもベッドの上でヘタクソすぎて付き合いがダメになったことがある』とか言っていた（そんなことを話されたオレはトマドイを隠せなかった）。『気を付けないと捨てられちゃうよ？』――同時に言われたアドバイスも、アルコールでユルユルになったマナの赤い顔と一緒に思い出される。
オレも、そうなのか？　こんなところに落とし穴があるなんてまったくのヨソー外だった。ちゃんと調べときゃあ良かった、ジーザス！　こんなことで、終わらせてたまるかってんだ！
「待ってくれッ、チ、チコクを無くした時みたいに、頑張るからさ。今度からゼッタイ！　満足させるッ！」
オレのタマシイを賭けた訴えに、ギャグなんてどこにも仕込まれてなかった。それなのに愛来は噴き出して、フトンでセクシーな口元を覆う。深夜ラジオはまだ詳しくないけれど、ひょっとするとオレの弁明と通じるところがあるのかもしれない。
「ふ、ふふっ……そうくるとは……陽香はっ、くく、面白いな……。違うよ、それは勘違いだ。明日はデートだろう？　今夜体力を使うのはどうかな、と思っただけのことだ」
「おうッ。それなら、オッケーなんだけどよ……」
オレのサエない表情を見て、愛来はマリア様みたいに微笑んで、さらに続ける。
「大丈夫だよ。特別なことをしなくても、陽香と一緒にいるだけで私は満ち足りた気持ちになれるんだ。慣れることと飽きることは違う。心配しなくてもいい」

ナルホドな。慣れることと飽きることは違う、か。サスガ愛来だぜ、オレにぴったりくる言葉を投げてくれる。オレのハートがハードにツーバスをブッ叩いていないのも、一年と少し経って愛来に慣れたからなんだ。イチイチどきどきばくばくさせなくても、ゲンキ百倍になれるからな。コイビト同士になったばかりの時は、しょっちゅう胸がハリサケそうだった。ま、今でもたまにアガっちまって、愛来にくつくつ笑われるんだけども。

「陽香も、私から元気をもらえているか？」

「当ったり前だぜ。隣にいるとパワーがみなぎる！　眼が冴えてきそうなぐらいだべ！」

「気持ちは痛いほど分かるが……もう遅いから、夜更かしはしないようにな」

「リョーカイ」

ネボーはしないようにしないとな。オレは遠足前夜に興奮して眠れなくて、揺れるバスの中で爆睡するタイプだ。明日のことを考えるとつい、期待と希望でいてもたってもいられなくなっちまう。

ジッサイ、オレの中では、明日のことやもっと先のことが、ソーダの泡みたいに浮かんではハジけていた。

どれもタアイないことばっかりだったんだけど、一個だけ、ハジけて散らすだけじゃモッタイないロックなアイデアが閃いた。ゆっくりとした寝息をたてはじめていた愛来の肩に触れる。リリックみたいにメモに残すこともいいんだろう。でも、これは、直ぐに口に出さないと、いけない気がした。

「寝てるか？」

「まだ……起きているよ」

よしよし、セーフ。コイビトの安眠ボーガイをするのは気が引けるからな。

ギターを弾く直前のように、息を、吸う。

「春休みにハネムーン、行こうぜ」

「ほう」

愛来はやっぱり驚いた。

そのまま二十秒くらい、部屋がミュートされた。

言葉のチョイスがマズかったか？　ハネムーンは早すぎたか？

『受験も終わったし、どっか遠出しようぜ』って気持ちの旅行だから、ハネムーンはオオゲサだったかな。半分くらい事故なんだ、事故、フカコーリョク。口から飛び出したセツナに言葉が変身しやがったんだ。

「や、まぁ、単なる卒業旅行なんだけどさ。二人でロックを探しに行けたらなーって……」

愛来はスグには返事を寄越さなかった。タップリ時間をかけた後、太陽よりもホットなキスをオレにブチかまして――

「ああ、必ずな」

――とだけ、ささやいた。

一撃でもっていかれた。一発で吹っ飛ばされた。一瞬で叩き込まれた。

ああ！　愛来！

ノックアウトされてフラフラする頭で、ココじゃないどこか〈旅立つ空想をする。

行き先を考えるのは、オレと愛来。

描いた人 哲仁

はろはろ
屋上の百合霊さん

近くて遠しい星空のように

北条 KOZ

今日も星がきれいですね…

願い事がかなうなら

私の願いは…

あ、

流れ星！

サチさんとずっと一緒にいられますように

サチさんと楽しくすごせますように

サチさんといっぱい甘えられますように

サチさんと仲良くできますように

サチさんとたくさんデートできますように

なんか欲張ってお願いしたら全然間に合わなかったー

サチさんは何をお願いしたんですか？

恵とヤリたい！

恵としたい！

恵とS●X！

恵とH!!

おもぎ

にっこり♡

ナイショ♥

ごめんなさい
でもそうなったら
ずっとこうして
手をつないでいたい
なんてね♡

終。
スミマセン…

祭り終了までそのままだったもよう

眼鉄太一

お祭りの喧騒から少し離れたところで、遠見結奈と阿野藤は一息ついていた。
「プールの二の舞ね」
「ご、ごめんね、結奈」
「別に阿野が悪いわけじゃないんだしいいわよ。あれ、でも間接的に阿野が悪いのかな……原因？」
「だから、ごめんってば～」
「冗談よ」
しょげる阿野の頭を撫でる。思った以上に柔らかく触り心地の良い感覚に、内心少し驚いた。
「プールの時も思ったけど、阿野ってやっぱりモテるのね」
「うひ～。悪目立ちしてるだけだと思うから触れないで～」
赤い顔でうつむく阿野。
結奈たちは今日、某所にあるお祭りに参加していた。とはいっても二人とも屋台はあまり回れておらず、阿野へのナンパの多さに辟易し避難している真っ最中である。
二人が逃げてきたのは、出店が並ぶ通りから少し離れたところにあるコンビニエンスストアの駐車場である。
人気は避けたかったけれど、皆無の場所へ逃げて何かあっては意味がない。自宅に帰るというのも一つの選択肢だったが、せっかくお祭りに来たのだから花火くらいは観て帰りたかった。

そういった理由から、取りあえず浮ついた人が少なくて、何かあったら避難でき、かつ花火も観えるだろうこの場所が選ばれたのである。
「はい、これ」
「ん？　ナニナニ～って、うわぉ、お好み焼き！　いつの間に買ってたの？」
「阿野がナンパの対応に追われてた時に。というか、お好み焼き買ってたら、阿野がナンパされちゃったっていうか」
「気が付かなかった理由は把握しました。で、いくらでしょうかお姉さん」
「五百円になります、お嬢さん」
「ありがとうございます！」
阿野が差し出した五百円を受け取り、代わりにお好み焼きを差し出す。
「そういえば結奈、コンビニの駐車場で出店のお好み焼きって、微妙に営業妨害になるのかな……」
「営業妨害とまではいかないだろうけど、まあ、迷惑かも」
「……お茶くらい買おっか」
「……そうね」
店員以外誰もいない店内で、お茶を二本購入する。
どうにもこの時間は出店の方に人が流れているようだった。
外に出て壁にもたれていると、祭りの喧騒がほんの少しだけ聞こえてくる。
その音をＢＧＭにお好み焼きを食べていると、阿野が突然

大声を上げた。
「今度は比奈ちゃんも連れてこよう、今日のリベンジだ！」
「比奈ちゃん」とは結奈とはお隣さんであり幼馴染であり姉妹みたいな間柄でもある狛野比奈のことである。
「び、びっくりした。ていうかリベンジって……」
「比奈ちゃんなら、それでも比奈ちゃんならやってくれる」
「何か分からないけど、変な期待を比奈にかけないでよ」
「今回は陸上とか受験勉強で忙しくて来れなかったけど、でも比奈ちゃんも来た方が結奈、絶対楽しいよ。そして今度こそ、ちゃんと出店もまわってさ。あたしは目立たないよう、変装もするし」
「いや、かえって目立つと思うわよ」
「じゃあ、お面買ってずっとつけてる」
「私たちの歳でお面つけっぱなしって、結構変だと思うんだけど……。ていうか、変に気を使わなくったって、一緒に居てくれればいいから」
そう言って諭すのだが、阿野は納得していないようだった。
「結奈にも楽しんでもらいたくて連れてきてさ、またつまんないふうになっちゃったら悪いじゃんよ」
阿野はそう言って、お好み焼きを一口頬張る。
茶化したノリではあるけれども、阿野なりに今日の事を反省し気遣ってくれているのがよく分かった。
「いや、あのね――」
阿野に声を掛けようとした、まさにその時。
花火特有の音ともに、空に鮮やかな色の花が咲いた。
「結奈ゆな、花火だよ！」

「え、ええ。そうね」
「粘った甲斐があったね～。ほとんどこれのために粘ったみたいなもんだったしさ～」
結奈の服を軽く引きながら阿野がはしゃぐ。
楽しそうに笑う阿野につられて、思わず頬が緩んだ。
「つまんなくなんてないよ、阿野」
花火の音に負けないくらいの声で言うと、阿野が少し驚いたようにこちらを見る。
驚く彼女に笑いかけながら、結奈は続けた。
「家族や比奈以外と、こんなふうに花火観ることなんて、もうないって思っていたから。だからね、こうやっていられるのが、本当に楽しいの」
高校では人と関わるのはやめようと思っていた。友達も作らず、ひっそりとしていようと心に決めた。そう決めた瞬間から、イベントごととは無縁の生活を覚悟していた。
そのはずが今、結奈は阿野と一緒にいる。
お祭りに一緒に行く相手に、結奈を選んでくれた。
他人との付き合いを完全になくさずにいられたのも、今こうして夏のイベントを楽しむことが出来るのも、阿野と出会えたからである。
だが今は、気持ちの全てを阿野に伝えることは出来ない。
長くなるし、行き成り語りだしても、阿野は困ってしまうだろう。
なにより、この雰囲気が重たくなるのが嫌だった。
全ては伝えられないが、全てを乗せるくらいの気持ちで。
いつぶりだろう満面の笑顔を見せながら、阿野に言った。

「だから連れ出してくれてありがとうね」
赤い色の花火が空を彩る。
そのせいか、花火に照らされた阿野の顔も、赤く染まっているように見えた。
「や、やだな～！　そんなお礼を言われるようなことしてないじゃんよ～。と、とも、友達なんだしさ～」
バシンと結構強めの力で肩を何度か叩かれる。照れているにしても、もう少し穏やかに照れてほしいものである。
「結奈にそんなこと言ってもらって申し訳ないんだけど、あたし結構自分のわがままで結奈連れて来ちゃったんだよね」
「そうなの？」
「そ、そう。その……お祭り結奈と行きたいな～みたいな？比奈ちゃん行けないかもって聞いてたし、もしかしたら断られるかもしんないって思ったけど。でも、一緒に行きたかったから、誘っちゃいました的な」
今度は緑色の花火があがる。
その光が結奈たちを照らす。
けれども阿野の顔は少しうつむきがちになっていたので、どんな表情をしているのかは分からなかった。
「それでこんな結果になって、けっこ一落ち込んでたんだけど、でも――結奈にそう言ってもらって安心したかも」
そういって顔を上げる阿野。
視線が合うと、何だか急に恥ずかしい気持ちになってくる。
それは阿野も同じだったようだった。
「なんだよも～。この雰囲気」
「知らないわよ」

お互いしばらく、照れくさそうに笑い合った。
最後の花火が打ち終わるのを見届けた後、ゴミをまとめ支度をすませて帰路につく。
イレギュラーなことが多かったけれども、伝えたい大切なことが伝えられて良かった――そう一人達成感を感じる結奈の手を、隣を歩く阿野がそっと握った。
「えっとさ。またどっか行こうね。次こそ比奈ちゃん誘って。いや、二人でもいいんだけど。お祭りだけじゃなくって、どこでもいいんだけどさ」
「リベンジ関係なく」と小声で足す阿野。
暗がりの下でも分かるほど赤くなった阿野に苦笑しながら、握られた手をそっと握り返した。
「そうね。また、行きたいわね」
きっと同じように赤い顔をしているのだろう。
そう照れくさい気持ちになりながらも、それでもしっかり伝わるよう、結奈はつぶやくのだった。

＊＊

「いや、まさか比奈ちゃんが本当にやってくれるとは思わなかったなぁ～」
「そうね、私もちょっと驚いてる」
一年後、結奈たちはまた同じお祭りに来ていた。
前と違うところがあるとすれば、それは元気よく焼きそばを食べている比奈の姿があるところだろう。
「ありがとね、比奈ちゃん」

「ん？」
ありがとうの意味をほとんど分かっていないだろう比奈は、困ったように頭を撫でられていた。
本能なのか直感なのか、比奈のおかげで、一行は上手い具合に阿野へのナンパを回避していた。とはいっても、食べ物関係の出店に直行しようとする比奈を追いかけているだけなのだが。
「あ、結奈ねえ。焼き鳥あるよ焼き鳥！」
「さすが比奈ちゃん。肉類への食いつき凄いね」
「粉物にも相当に食いついてるはずなんだけど。あんまり食べると、お小遣いなくなるわよー」
「ていうか、比奈ちゃん見失っちゃいそう！」
慌てて比奈を追いかけるが、人ごみのせいで今度は阿野ともはぐれそうだった。
「ほら、阿野」
二人そろって別々の場所へ行かれては、追いかけるのが大変である。
そう心の中で言い訳をしてから手を差し出すと、阿野が少し視線を泳がせた後、そろそろと結奈の手を取った。
「あはは、忙しいね今回も」
「うん、だからきっと――今回も楽しいわよ」
握る手に力を込めると、やんわりと阿野が握り返してくれる。
その事が嬉しくて、顔を見合わせて笑い合った。
握り返された手が熱い。
それは夏の暑さのせいなのか、祭りの熱気のせいなのか。

色々な答えが浮かんでは消えていく中で、一つだけ答えが残ったのだけれども――それを受け止める勇気が、今の結奈にはまだなかった。
（最近色々と毒されてる部分もあるし、考え方極論なような気もするし、雰囲気に流されてるだけかもしれないし）
慎重なのか臆病なのかは分からない。
取りあえず、答えを先送りにするなかで、たった一つだけ分かっていることがあった。
（でも――こういう雰囲気は、嫌いじゃないな……）
不思議と頬が緩む。
この事実だけは、お祭りのせいではないと確信していた。
「それじゃ、いきますかね～」
「そうね」
比奈と合流するまでに顔の熱さが引くことを祈りながら、二人はぎこちなく歩き出すのだった。

END

あとてんね

あと2人？

椎名かじん

音七！あんたも寝てないで言い返さないとあたしらカップルにされちゃうよ!?
ゆさ
ゆさ
あたしゃ阿野なら構わないよ～
マジですか!?
あたしにこれから彼氏が出来るとも思えないしね～
お嬢様と付き合えるなんてラッキーだよぅ
じりっ…
ほらほら
あ
あんたも観念して女の子と付き合っちゃいなさい
うぅ～…
じり…
だ
だったらあたしはゆ…結奈と付き合いたい…です
…
ええっ!?
三角関係たぁやるね～阿野さすがだね～
オチは忘れました

二年目の二人／九日
ふぅ…
平成二十四年度
入学式
九ツ星女子学園
もう二年生かぁ…
始業式
体育館集合
移動
教室集合
オリエンテーション
終了
結奈と出会ってから
一年経ったけど
今でも学校では
少し寂しそうなんだよね

でもまぁ

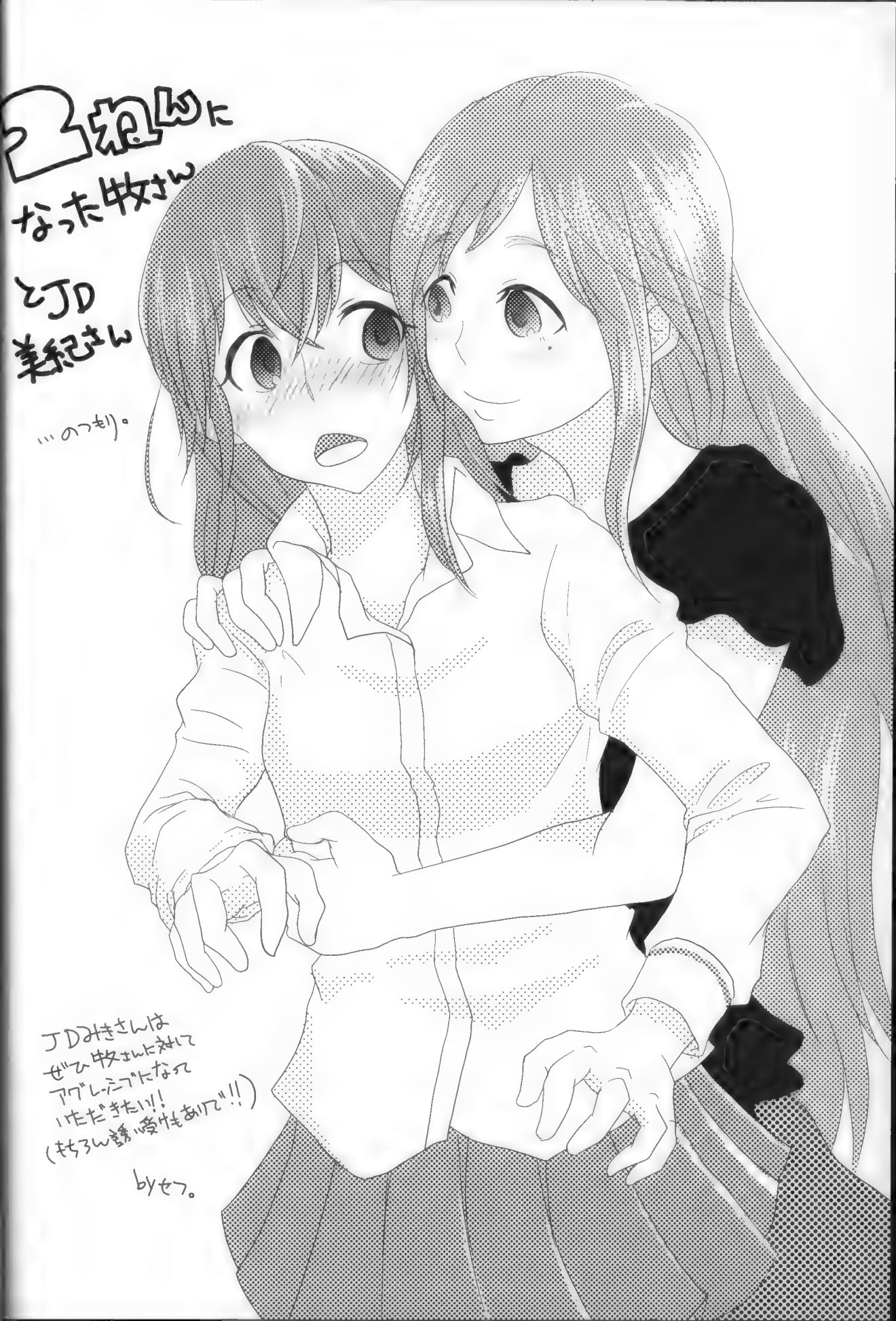
ガラッ

今年は
比奈ちゃんもいるしね

タッ

結奈も去年より

学園生活を
楽しんでくれるといいな


3組に
なった牧さん
とJD
美紀さん
…のつもり。
JDみきさんは
ぜひ牧さんに対して
アグレッシブになって
いただきたい!!
(もちろん誘い受けもありで!!)
by セフ。

いやー、悪いね、あたしでさ

申し訳ないわー

……

えっと？。

お互い様でしょう？。

未練、ある？。

お互い様なら意地悪な質問ー

……じゃあ正直た。

そりゃあ、ま？、……ねえ

……しばしま？、想像の上を行くというか

ジョークでもそこは違うっていうトコだねえ

……ゴチンナサイ

驚いたわよ

まさか

ねえ

ねー

はー

あの二人が付き合ってたとはねー

あ！あれ面白そう!!

失くしてから気付く恋心って切ないものね…

お!!

はー…

ほら、私たちも。

失恋同士で余りもの恋人ってのがまた…

あたしらしいか？

…沈黙になると何か恥かしいわね、コレ。

はいはい。

楽しいダブルデート

END

放課後は彼女のカノジョ

千歳

午後二時過ぎ。陽射しは一向に弱まることを知らず、彼女のきらきらは増してゆくばかり。

（……早くしないと、この光に灼かれて倒れてしまうかも）

だから声をかけたいのだけれど、かける言葉が思いつかない。

ねえ、とか、ちょっと、とか。そういう『濁した』言葉だと、今の彼女はたぶん振り向いてはくれない。

ベンチに腰掛けた私の足元には、彼女―剣峰さん。

私は、誕生日プレゼントにと彼女から贈られた靴を、何故か彼女の手ずから履かせて貰っているところで。気恥ずかしさと手持ち無沙汰、その他もろもろが綯い交ぜとなって、なかなか視線が定まらずにいた。

頭を垂れ、地面に膝つく彼女の姿。コンクリートに焼き付くその影は、まるで数字の2を映しているようにも見える。

2。

……本当はわかってる。

この子が望んでいる呼び名。二文字。

さっきだって、そう呼んで欲しいって本人に言われたばかり。

なのに、そのたった二文字を口にすることが、なんだかまだ私には難しいみたい。

「どうかなぁ。サイズは間違ってないと思うんだけど」

不意に剣峰さんが面をあげた。こっそり見つめていたことを悟られないように、私は慌てて笑顔を浮かべて答える。

「ぴったりよ。大丈夫」

「爪先が空いてたり、踵が痛かったりしない？」

「ええ」

彼女の手の内から足を抜き取る。触れられていた部分が熱い。

爪先を触って隙間に指を入れて、履き心地を確かめながらも、意識は目の前でしゃがんでいる剣峰さんに向いてしまう。

ああ……ダメだな、私。舞い上がっちゃってるみたい。

二度目の告白をされて、それを受け入れ、初めて出来た恋人。

嬉しい。でも、恥ずかしい。どうしよう。そんなことばかり頭を駆け巡って、他のことが考えられない。

「よかった。月代ちゃんはこれ以上大きくなる心配がないから、そういうところ、楽でいいよねぇ」

からかい混じりの笑い声に「もう」と軽く怒ってみせたけど、剣峰さんは嬉しそうにもう片方の足へ手を差し出してくる。

「次は左ね」

「じ、自分で履けるから……」

「だーめ。はい、そっち、貸して」

半ば強引に左足を取られた。

宛てがわれる靴。夏の濃い青より透き通った水色をしている。清々しくて、眩いくらい。

対する私の顔はもう、確認するまでもない。たぶん真っ赤で。この陽射しに感謝しなくちゃいけないかもしれないな、なんて。

もう片方の靴も履かせてもらい、私はその場で立ち上がった。
うん、本当にちょうどいい。一歩歩いてみただけでも彼女が私を想って用意してくれたことが伝わってくるようで、嬉しい。
「ありがとう、―……」
逡巡。
すぐに、取り繕うように言葉を続ける。
「大事にするわね」
「ううん、こちらこそありがとう」
不自然に空いた間に、しかし、彼女は気付かなかったらしく、何故か逆にお礼を返されてしまった。
「この靴さぁ、ぜったい月代ちゃんに似合うと思ったんだよね。やっぱ私の目に狂いはなかった。かわいい。すばらしい！」
ふおおおっ、といつもの叫び声をあげて興奮気味の剣峰さん。
対する私は嬉しさ半分、呆れ半分。思わず気が緩んでしまい、苦笑が漏れた。
「もう。剣峰さんったら、」
「月代ちゃん」
あっ。……と、気付いた時には、遅い。
今しがた注意して抑えたはずの言葉が、呼び名が口をついて出てしまっていて。
「桐って呼んで、月代ちゃん！」
わくわくした瞳。待ってましたと言わんばかりの表情。
そんなまっすぐな視線を向けられると……なんていうのかな、ハードルが上がった感じがするというか。
やっぱり唇は動いてくれない。
「ふ、ふたりっきりの時だけね」
「今、ふたりっきりだよ？」
「……学校以外でね」
「えぇー」
はぐらかす私の言葉に、目に見えて気落ちする剣峰さん。
こんな逃げ方、ずるいよね。ごめん。
（……一度、口にしてしまえば、簡単なことだと思うんだけど）
剣峰、桐さん。桐ちゃん？　桐……うん、桐、かな。
もしかしたら、こうして繰り返しているうちに、ひょいっと口からこぼれてくれるかもしれない。そう思って、心で何度もシミュレートする。
そんなに望むのなら、すぐにでも呼んであげたいと思う。
でも、いざ口にしようとすると私の中ではまだ照れのほうが勝ってしまうみたいだから。
「いや待て、私……それって考えようによっては、学校の外で月代ちゃんと会う機会ができるという……？」
（……そりゃあ、私たちは恋人同士になったんだから、デートぐらいするんじゃないかしら）
恋人同士。彼女の、カノジョ。ふたりの関係性を再確認して、さらに頬が熱くなるのを感じる。
いっぽう、剣峰さん―桐のほうは、見ての通りの平常運転。散らかしっぱなしだった包装紙を長い手足で回収しつつ思考にふけっている様子で、時折にこにことだらしない笑顔を見せる。
こちらばかりがドキドキさせられてるようで、ずるい。
桐はドキドキしないのかな。私が、変に意識しすぎ？

「……ねえ、お返しは何がいい？　たしか誕生日は……」
「うん、三月二日。あ、でも、別に無理しなくていいよ。私が月代ちゃんにプレゼントしたかっただけだから」
「そういうわけにはいかないわ。ほら、去年も貰っちゃったし」
「えー？　ほんとに気にしなくていいのに」
私の隣に並んで腰掛けて、「うーん……」と唸る桐。
しばらくすると何か思いついたようで、パッと表情を変えた。
「じゃあね、キス！」
「……えっ!?」
キス？
そ、そりゃあ、私たちはその、恋人同士なんだから。キスもするかもしれないけど。
「だ、ダメ。そういうことはまだ早いです」
「ダメなの？」
「ダメ。それ以外で」
「ちぇー」
口ではそう言いながらも、顔は笑っていて。そこまで本気で言っていたわけではないらしく、すぐに引いてくれる。
それにしても、キスって。簡単に言ってくれるなぁ。
こちらのほうが年上なはずなのに、からかわれているみたい。
……なんだか悔しい。
「ふぇ？」
意趣返しのつもりで、隣の彼女の手に自分の手を重ねてみた。
「月代ちゃん？」
「……その、キスはまだダメだけど、」
先ほどまで桐に触れられていた足のように、今度は手が熱を持つのがわかる。
「こういうことから、少しずつ進んでいきましょう？」
私たちは始まったばかりで。
私はまだ彼女の名前も呼べないほどの初心者だけど。
「……」
不自然な沈黙。
返事を耐えかねて振り向くと、驚いた表情を浮かべた彼女が何故かパッと反対側へそっぽを向いてしまった。
「……剣峰、さん？」
重ねた手のひらが、怖気づいたように引き気味に。
「どうしたの？」
「いや、えっと……わ、笑わない？」
「笑わない」
神妙な顔で頷いてみせる。
剣峰さんは落ち着かなさげに前髪の毛先を弄り、口を開いた。
「その……なんか、改めて恋人同士ってこと意識しちゃって」
「うん」
「……どう振舞ったらいいかわからなくなった」
「……」
「わ、笑ってる！」
「笑ってるんじゃなくて、微笑ましく思ってるの」
「違いがわかんないよぉ」
うぅ、と小さく唸って桐が頬を膨らませた。大人っぽい顔に子どもっぽい仕草がアンバランスで、なんだかかわいい。

（……そっか）
いくら大人びて見えたって、彼女はまだ学生で、カノジョが初心者なのは同じ。
ううん、子どもな分、私よりもわからないことだらけだろう。
（ドキドキしないはずないじゃない）
桐。私の恋人。
そうやって、彼女のことについて考えを巡らせているうちに、何かが全身に馴染んできたような気がした。
オイルが回ってきたのか、エンジンが温まってきたのか―
「そ、そろそろ部室に戻ろっか、月代ちゃん。長居し過ぎると体にもよくないし。暑いし。ここほんと暑い」
恥ずかしさをごまかすようにして彼女が立ち上がる。
「別に私、そこまで病弱なつもりはないんだけど……」
「でもさっきから顔真っ赤だよ」
「それは、」
今なんだ、と直感する。
「―桐も同じでしょ？」
たった二文字。やっと口にできた私のカノジョの名前。
桐は、驚いたように口をあんぐりと開けて。
「ず、ずるい！　このタイミングでそれはずるいよ月代ちゃん、学校以外じゃないとダメなんじゃなかったの！」
「今は放課後だから特別」
なんて、ね。そのうち、ずるずると呼んでしまいそうだけど。
でも、それでもいいのかも。
少しずつ進んでみよう。
まずは、一歩踏み出したばかりの、曖昧な二歩目から。
「これからよろしくね、桐」

〈了〉

愛来ちゃん
遮二無二かわいい！
デレと激デレの2面性を持つ
愛来ちゃんが大好きです
百合霊さんは魅力的な
キャラがたくさんいるので
今後も機会があれば
是非描いていきたいです！
描いた人：みちよん

……何をやっている。

二番星
DS

見ての通り
モフモフしてる
最中だよ♪

ね～な～

ほどほどにしないと
いつか通報されるよ

大丈夫。
女の子同士の
スキンシップだから

キリッ

二位でこの有様なら一位はどうなるのかね……

カワイイものランキングだっけ？

そこはご想像にお任せします♪

もー会うたびにひどい目に遭うし

これから桐とは距離を置くことにするよ！

フィールド張っちゃう！

そんなこと言って毎回協力を求めてくるのは誰かなー

あわわ

っと。これ以上したら阿野が本気で逃げちゃうから

ここは紳士的に我慢しよう。

どこがだよ！？

というわけで、ゲームでもしよっか？普通の意味で。

ほー

普通じゃない意味のゲームもしてるんだ

してないよ！

あはは、ごめんいじりすぎた

なんだよも～

阿野真っ赤。

このステージは速射できる武器のがやりやすいよ～

なるほど！その発想はなかったわ

へぇーさすがねなすごい

やっぱりこういうゲームは音七ちゃんのほうが一枚上手だわ

それほどでも～

たのもー！

音七来なかった？

おっ、いたいた

ぴょこ

もー またゲームしてるの？

あ、ごめんごめん 私が引き止めたから

台本の打ち合わせするって言ったじゃん！

なんで逃げるのー？

ずるるる

なんだか邪魔しちゃわるい空気だったから退散しただけだよ～

面倒くさいとか
ねむいとか
言いつつ

あれで案外逃走劇を
楽しんでると見た

おおっ
それはそれはまた
新しい属性だね〜

よし、じゃあ私も
ちょっと部室に寄って
から帰るわ

よ！
今日も
ご苦労さん
部長殿！

ビシッ

何キャラだよ

さて

こっちもそろそろ
いい時間っと。

桐は
月代ちゃんが
一番カワイイ
ねなは
うみちゃんと
ささちゃんが
一番よく居る仲間
そしてあたしの
一番の親友は……

あたし達はお互いの
一位にはなれないし
ならなくていい

二番目はたぶん
あたし達にとって
もっとも心地いい立ち位置

もしもし
結奈？

うん、あと
ちょっとで着くよ

ほんと？
楽しみだね～

明日もまた、一緒に遊ぼうね。

おわり

未恋語り

ユリカモメ（仮）

わたしはしゃぼん玉の中で夢を見てる。両手で膝を抱え、丸くなって丸くなって。しゃぼん玉は現実？　それともふわりと浮いてるこの空間が現実？　じゃあ、わたしの見てるこの夢は一体どっちなんだろう。

肘をつつかれてる感触にはっとする。その姿勢のままで二度まばたき。沙紗が呆れたような目つきでこっちを見ていた。次いで認識したのは、小指の先から神経が通っていくような感覚。

「放送中になにぼーっとしてるんだよ、羽美」

「あ……うん、なんでもないよ、ごめんごめん」

そう言いながら口元に手を運ぶ。あ、ちゃんと動く。うん、それによだれはたれてない。よかった。

寝不足でうとうとしてたわけでもないのに、すごく現実味が薄い。これ、白昼夢っていうのかな。中々できない貴重な体験だよね。でも内容を全然覚えてないのが残念。どうせなら三人で大冒険してる夢だったらよかったのにと悔しがりながらも、どうしてか覚えてないくせにちっともそんな楽しい夢には思えなかった。

そろそろ曲からトークに戻るのを音七がブース越しに身振り手振りで伝えてくれる。うん、しっかりしないとね。少し乾燥しちゃったのかちょっと違和感を覚えてのどの辺りをさする。

「もしかして具合悪いのか？　心なし顔色が悪いような」

曲の終わりが近いから顔を寄せて小声で訊いてくる沙紗に、大丈夫とだけ答えて精一杯の笑顔を返した。ただそれだけのやり取り、時間にしたら数秒見つめ合っただけでわたしはどうしようもなく照れくさくなる。

わたし一木羽美と双野沙紗は付き合っている。

あの雨の日のことをきっとわたしは忘れない。

親友だった沙紗から告白されたあの日のこと。

わたしはいつも勢いと思いつきで行動しちゃうから一つの傘に入るなんてよくあることだったのに。今では思い出すだけで顔が熱くなる。ブースで二人だけより緊張するんだ。だってすごく狭い密室みたいなもんじゃん。あれ以上に密着する空間っていったらそれこそお風呂とかベッドの中とか……って、わわ、わたし何考えてるの！

沙紗が傘を持ってくれて、歩く毎に肩が触れては離れてを繰り返すから、左の肩や腕が雨で濡れていくのも全然わからないくらいに右半身だけがやたら熱かった。

沙紗の買い物が目的だったのに、お店を回ってる間もわたしは沙紗のことをほとんど見ることができなくて、内容もろくに聞かず相槌を打ってるだけだったと思う。そんなだから、結局目当てのものを見つける前に別れちゃったんだけど。

「えーっと、じゃ、また」「う、うん、また月曜ね！」

そんな感じの歯切れの悪い別れだったと思う。でも、帰り際に沙紗から届いたメールを見てふわふわしてた現実が形を得た。

ああ、わたし、沙紗と付き合い始めたんだって。お互いにそう口にしたわけじゃないんだけど、沙紗がわたしを好きだって言ってくれて、わたしはそれにうれしいって返して、親友から恋人になったんだって。

気づいたら携帯電話を持つ手が震えてた。今までどんな風に言葉を交わしていたかもわからなくなって、家まであと十分もかからないところで立ち尽くしてずっと返事の文面を考えてた。

わたしの指は臆病だ。文章を打っては消してを繰り返して、沙紗が伝えてくれた言葉の半分も返すことができない。

それからというもの、机の上のジュースを取る時も、部室のドアを開ける時も、キュウセイラジオのお便りを読み合ってる時も、沙紗の指から目が離せなくなった。

何かと理由をつけては触ってた沙紗の黒くてきれいな髪も、あの日から触ることができなくなった。

ずっといいな、って憧れてた沙紗を構成する素敵なものたち。それが今、唐突に全然違う形で自分のものになった事実を持て余すわたし。

これまでちっとも意識してなかったわたしがこんなだったら、他にも沙紗のことを好きになってる人だっているかもしれない、と思うと気が気でない。だって、沙紗はすごくきれいだから。

こんな気持ち、今まで抱いたことなかった。友達はみんなで輪になって楽しむイメージなんだけど、恋人っていうのは隣同士だったり向かい合ったり、時には背中合わせだったりもする。そんな印象だけど、わたしにはもちろんそんな実感はない。

音七の口ぶりからすると、沙紗は大分前からわたしのことを好きでいてくれたのはわかるんだけど、本人に聞いてもはぐらかされちゃうんだよね。沙紗は「そ、そんなことどうだっていいだろ！」の一点張りで。

わたしなんかのどこがいいんだろ。

二人にも事ある毎に言われてしまうくらい考えなしなわたしだけど、でもそんなわたしだって考えたり悩んだりすることはある。

でも、一度音七に二人きりで相談した時なんて、「羽美のそれは空回りの繰り返し」とばっさり切って捨てられた。うう、今思い出してもぐさりとくるよ。

時間は流れてるなんてゆったりしたものじゃなくて、立ち止まった瞬間にわたしを置いて過ぎ去る音みたいなもの。そこには余韻だけが残る。

一人でいる時間は静か過ぎてこわい。沙紗や音七と長電話をして、通話を切った後に訪れるあの感覚。

生き急いでるなんてそんなつもりないけど、でも。

わたしを不安にさせるそのイメージが、夏合宿で沙紗と触れ合った後もどうしても拭えないんだ。

「なんとか終わったな。羽美、本当に平気か？」

「んー、大丈夫じゃないかも」

沙紗があまりにいつも通りのクールさなのでちょっと意地悪したくなったわたしはわざとらしく額に手を当てる。

「おい、風邪とかなら無理するなよ」

「沙紗がキスしてくれたら治るかも」

「……音七がいるのにそんなことできるわけないだろ」
「音七、寝てるよ？」
それはさっき確認済みだった。
「……あー」
うろたえてる沙紗が音七の方を確認して振り返るより先に、わたしは目の前で唇を閉じてみせる。他に誰もいるはずがないのに沙紗は何度も周りを確認してるみたい。長い長い間の後でようやくキスしてくれた。

沙紗はきれいだけど、かわいい。付き合い始めてから、仕草ひとつひとつに今まで受けていた印象とは別の面を感じて毎日が新鮮なんだ。多分わたしの見方が変わったからかな。
背が高いことや目つきが悪いことで威圧感を与えてるんじゃないかって思ってるところとか、普通の人なら言わないで済ましてしまうこともはっきり言うけど、同じ口が悪いでもわたしや音七に言う時には言葉の裏にやわらかさを感じるところとか。時々本当に傷つくこともあるけど。
それに、わたしが沙紗に憧れてるって言うと、羽美は羽美のままでいいだろ、ってまっすぐ伝えてくれるところとか。
「はいはいご馳走様。ついでに言うなら、沙紗、前よりも髪や爪の手入れに時間をかけるようになったね」
うん、知ってる。それなのにわたしがちょっとだけ前髪を切ったり、新しいストラップを付けてたりするとすぐ気づいてくれるんだ。
わたしは新しいものや刺激的なものが大好きだけど、それはきっと、今あるものが一番なんだって自覚するためにひたすら集め回ってるんじゃないかな。
「羽美、それは違うと思うな」
「んん？　何かおかしなこと言ったかな。わたし的にはうまく説明できたつもりなんだけど」
「うまく説明できたからってそれが正しいとは限らないでしょ。例えばさ、羽美は沙紗のどこが好きかって聞かれたらどう答えるわけ？」
「え……そ、そうだね、背が高くてすらーっとしてるところとか髪がきれいなところとか、顔立ちも端正だし、指も細くてきれいだよね。あとしっかり自分の意見を持ってるところとか、えっとえっと」
頭がこんがらがっちゃう。だってそんなことあげればきりがないけど、全部含めて沙紗だから。
「うん、模範解答だね。でもそれじゃ、もっと背が高くて髪が綺麗で美人な人がいたらその人のこと好きになっちゃうわけ？そんなわけないよね。要するにそういうことだよ。あ～、なんでこんなことといちいち説明しなきゃなんないかな」
「音七、大人の女みたいだね！」
「はぁ？　あたしのことなんてどうでもいいよ～。それにそうやってはぐらかすのも羽美の悪い癖」
図星というか言葉もない。勢いのまま喋り続けて動き続けて、止まったら死んでしまう回遊魚みたいに、わたしはきっと自分を見つめることから逃げてる。
あの日。屋上で音七に怒られて、抱えていた不安がなくなっ

て沙紗と付き合えるようになったあの日。その一方でわたしは、自分の気持ちの本当がわからなくなってたんだ。

友情と恋。

わたしにとって友情は何事にも代えがたいもの。これまで生きてきた自分を構成してるあまりに大き過ぎるもの。

それに比べてわたしにとっての恋はあの雨の日に唐突に自覚した、させられた、まだ扱いきれてない生まれたての赤ちゃんみたいなものなんだ。

わたしはあの時、音七に今まで通りに戻ろうって言ってほしかったのかもしれない。沙紗とは付き合わないでほしいって言われるのを期待してたのかもしれない。

勝手だな、わたし。結論を全部人任せにして、沙紗の気持ちも考えないで、音七の優しさにも気づかないで。

例えばわたしが沙紗を好きで、沙紗はわたしのことを恋愛対象に見てなかったとして。その時にわたしは恋を取ったのか、友情を取ったのか。

そもそもそんなことで悩んでしまう時点で、わたしにとって恋はなんなんだろうって、どうしても思ってしまう。

「あたしらはさ」

音七はやさしい口調で言う。

「神様じゃあないんだ。悩むし迷うし、楽しいこともあれば、嫌なことだっていっぱいある」

腕を組んで語る音七は凛としていて、沙紗とは全く別だけど、でも確かにかっこいい。

「だから、こうじゃなきゃ、なんてないんだよ、きっと。好きがよくわかんなくたって、恋と友情を天秤にかけたって、別にいいじゃん。あたしがあの時我慢ならなかったのはさ、羽美が勘違いしてるから。あとは沙紗の気持ちを大事にしてほしかったからなんだよ」

あたしのことなんてって言うと怒るだろうけど、あたしはさ、ずっと二人がどうにかなんないかなって思ってたんだから、と続けるいつになく雄弁な音七。

「その上で、羽美がやっぱり沙紗のこと友達以上には見れないって言うんならそれでいいんだし、そもそも沙紗は多分覚悟してたんだよ」

うん。沙紗すごいよね。勇気出してくれたんだもんね。

「だからさ、自分が出した答えがどんなにみっともなくても、頼りなくてもいいんだよ。それが羽美なんだから」

わたしらしさって、なんだろ。

励ましてくれてる、応援してくれてるってわかるのにそんな自問自答が頭から離れてくれない。言葉にしなきゃ伝わるわけもないのに、心の中だけでつぶやいてしまう。

だってわたしは。

答えに自信がないんじゃなくて、答えが見つからないんだ。

「……羽美、羽美ってば」

体を揺すられてる感覚。強くないその動きは、まるで揺りかごみたい。

「はあ、こっちの気も知らないでよく寝てられるよな」

沙紗の声がさっきより近く聞こえる。何にも例えることのできない、心地良い音。
顔にあたたかい風を感じるなってぼんやり思ったところでようやくまぶたを開けると、すぐ目の前に沙紗の顔があった。
「な……っ！」
驚いたような照れたような顔で固まってる。いつものかっこよさはないけど、かわいい。
なのに頭の中はついさっきまで見てた夢のことでいっぱいで。いつもなら夢の内容なんてほとんど覚えてないのに、幼い頃のあの記憶みたいに二人と……ううん、沙紗と疎遠になっちゃうイメージがあまりに鮮明で、わたしは。
「沙紗ぁ！」
叫ぶのとどっちが早いか、思いっきり抱きついてしまった。その勢いのまま後ろにあった椅子が倒れて床に押し倒してしまう形になる。沙紗は起き上がろうとしたけど、わたしはまた抱きついて離さない。
ぎゅっと。変な姿勢だから抱き締めてるというよりはただひっついてるみたい。
沙紗はあー、とかうー、とか言いながらわたしの背中をぽんぽんと叩いてくれた。駄々をこねる子供をあやすみたいに。お互いの胸が当たるくらい密着してるから、じわりと沙紗の体温が伝わってくる。でも、触れてないはずの首元が一番熱を帯びてた。
沙紗は、何も聞かない。「大丈夫か」とか「どうした」なんて聞かない。ただただずっと、静かに包んでくれてた。
そのまま、どれくらいの時間が経っただろう。安心できる沙紗の腕の中で、ぐちゃぐちゃの感情が言葉になる。
「沙紗はわたしに告白してくれた時、不安じゃなかった？」
わかってて聞くわたしはずるい。
誰にも相談できなくて、きっとずっとずーっと悩んでたよね。でもそんな気持ちが伝わったのか、沙紗は溜息をついて。
「怖かったし、不安だった。何度も言わないでこのまま音七と三人友達で仲良くしてたらいいって思った。だってそのままでも十分楽しかったんだ」
ぶっきらぼうな沙紗の言葉がやわらかい。
「でも、もうどっちつかずじゃいられなかった。羽美のことが好きで、好き過ぎて、気づいたら友達としての接し方がわからなくなってたから」
「……沙紗」
「正直、音七に背中を押されなかったらどうなってたのかなって思うよ。考えもしないけど、もしかしたらまた友達に戻れたのかもしれない。自分の気持ちに嘘はないって思ってたけど、でも」
本当なんて嘘よりあやふやだ、と沙紗は詩的なことを言った。嘘は『本当』の後に生まれるものだから常に嘘であれる。でも『本当』は常に変化してて、全てのものは本当未満と本当を行ったり来たりしてるんじゃないかって。
ああ、同じだ、沙紗も一緒なんだ。そう思ったらふっと体から力が抜けて、ぽろぽろ涙がこぼれる。
「え、あれ、あたし変なこと言った？」

なんで泣いてるんだよ、と沙紗の声が弱々しくなってく。
だってうれしくて。
沙紗が抱き締めてくれてた力をゆっくりゆるめて、少しだけ離れたわたしたちは自然と見つめ合う形になる。
「ん、えへへ。顔ぐしゃぐしゃで恥ずかしい」
「隠さなくていいよ。羽美の泣き顔、もっと見たい」
「ぐすっ、なんでよぉ……」
「だってかわいいから。羽美の笑った顔も怒った顔も困った顔も全部かわいい。それに、泣いてる顔なんて見れるのはあたしだけだって思うと嬉しいから」
「沙紗、いつからそんなにいじわるになったの」
「ばか、羽美がそうさせるんだろ」
指がわたしの涙を拭う。その指を手のひらで包んで。驚いた沙紗の目をもう一度じっと見つめて。わたしはそのまま沙紗の唇を奪う。
臆病な指よりずっと大胆なわたしの。
慎重な心よりずっと強欲なわたしの。
「んっ……」
勢いに反して焦らすようにちょっと触れただけの唇からわずかに冷たい感触が伝わってくる。軽く吸うようにしている内に、最初は強張ってた沙紗も応じてきた。
焼け石に水って、きっとこんな感じ。
「お、おい羽美」
唇が離れるや戸惑う声を出す沙紗がかわいい。もうとまんない。だって。
沙紗はわたしのものだから。
「いい、よね？」
自分の口からそんな言葉が出てくるなんて思いもしなかった。何かを言おうとした沙紗の口を塞ぐ。
「んっ……」
「あ、は、むっ、はぁ……」
「沙紗、とろんとした顔してる」
「う、羽美だって……」
どれくらい経ったかわからないけど、会話の合間に舌を絡め合ってるから、お互いの口元はすっかり唾液まみれ。それでも唇だけじゃ飽き足らないわたしは、そのまま頬を舐めて首元へ滑らす。
「……っ！」
沙紗の体が跳ねる。でも乗っかってるから逃げられないよね。夏の合宿の時はお互い何もわからなかった。今も全然わかってないけど。でも、沙紗に触れたい、沙紗を感じたい。
本当とか嘘じゃなく、ただただ今のこの気持ちを伝えたい。
そう思っていると、やっと指が動いてくれた。はだけてるお腹の辺りに手を伸ばすと沙紗と目が合う。
「ひゃっ！」
見惚れてた隙に沙紗はわたしの太ももを触っていて、思わず変な声が出ちゃう。
「羽美ばっかりずるい。あたしだって羽美に触りたい」
「もう……はぁ、んっ」
沙紗の長い指がわたしの肌を這う。まるでどっちが多くの場

所に触るか競うみたいにひたすら行為に没頭して頭がぼーっとしちゃう。
「ん、はぁ、あ……羽美、羽美……」
「さ、沙紗ぁ……ふぁ、んん！」
背中を伝っていく汗の感覚だけが、沙紗と溶けてるわたしをぎりぎりこちら側に繋ぎ止める。
今なら胸張って言える。沙紗のことが大好き……

※

「本当、世話のかかる二人だな」
あたしは廊下の壁を踵でとんとんと叩きながら、でも実際は思わず笑っちゃうくらいに機嫌がいい。さて、これなら今日は帰っちゃって問題ないな。来週の放送用に持って帰るはずだった資料は中に置いたままだったけど、野暮なことしたくないし。
と、背中を預けていた無機質な感触に別れを告げようとしたところで、職員室から出てきた阿野と目が合った。
「あれ、そんなところでどうしたのねな？　もしかして部室の鍵でも忘れたとか？」
「そんな阿野みたいなことしないよ～」
わかってるのかわかっていないのか、阿野の突っ込みは読み取り辛い。一見抜けてるようでいて人のことよく見てるからな。地雷を踏まないようにって自衛だけど、自分のこと以外にはすごい敏感だよね……まぁ、だからあいつらとは別の意味で心地良いんだけどさ。
「二人で大事な打ち合わせしてるみたいだから、あたしは途中退場だね～」
「ふうん？　じゃ、久しぶりに桐と三人で遊ぼっか」
「桐は今日部活が外せないって言ってたよ」
「あ、そうなんだ。じゃあ、今日はこのまま解散かな。結奈はお母さんが夜勤だからって早めに帰っちゃったし」
ふむ。結奈と一緒に帰らなかった理由はなんだろうな。この様子だと別に残ってなきゃいけない理由なんてないだろうに。あたしはまた悪い癖であれこれと考えを巡らせる。
「ん～、せっかくだから久々に阿野の家連れてってよ」
「んん？」
「悩みが一つ解決したっていうか、今ならすっきり眠れそうだからさ～」
「自分の家で寝ようよ……」
ごもっとも。でも、ここはもう一押し。
「阿野と寝るとぐっすりなんだから仕方ないね～」
「誤解を招く言い方はやめようね！」
「噂とかされると恥ずかしいし？」
「ここでそのネタわかる人ってあたしくらいじゃないかな！」
「阿野にだけ伝わればいいよ～」
深い意味はない、ないと思う。
なんだってそうだ。眠気の前にはどんなものも意味がない。優先順位で言えばの話。逆説的に、ぐっすり眠らせてくれる相手ならもしかして同時に叶うのかもね。
隣を歩く阿野の横顔を盗み見る。あたしよりほんのちょっと

だけ背が低い。スタイルは全然違うけど。別に気にしてないし、もたれるのにちょうどいいし。

「？」

「んにゃ、何でもないよ～」

もうすぐ冬も間近。修学旅行で例の如く羽美に振り回されることを思うとちょっと憂鬱だけど、さすがにその頃には沙紗ももう少しはしっかりしてくれるんじゃないかなんて淡い期待を抱きつつ、それでもだめならしょうがないな、なんて思うあたしも変わったなって思う。

「ねなの頼みじゃ断れないね、うん、いいよ」

そう言って笑う阿野にちょっとだけ心が痛む。なぜって？

桐は部活が外せないなんて出任せだから。

だって、今日はゲームなんてする気分じゃないんだよ。肩の荷が下りたからとにかく眠い。このところ続いてた恋愛相談も人生相談も柄じゃないから、もう限界なんだ。

「よく言った。今日は寝かせないからね～」

「寝るんじゃないの！？」

「やることやったら」

「阿野さんにそういう冗談はやめようね、真に受けるから……」

「……へえ」

聞き捨てならない台詞。眠くなかったらこっちまで変なこと考えちゃいそう。まあどうでもいいか。起きたら考えよ。もし阿野が起きてる間に目を覚ましたら、その時は。

自分に嘘はつかない、そう決めた。

（了）

無理難題をおっしゃる　4月1日

by悠季

「あまやどりのおはなし」

佳賀梨　夏琉

澄んだ青色が仄暗い灰色へと移ろいゆく様は非常にゆっくりであったのに、それから黒へと色を変化させるのは予想以上に早かった。

水滴を肌に感じ、見上げた空は瞬く間に暗雲を纏っていく。

あ、やばい。と思ったのも束の間で、程なく大粒の雨がアスファルトも黒く変色させていった。

「阿野、走るわよ」

「うひゃあ、風までキツイよ！」

阿野にそう言って、目に入った古い民家の軒先へ避難するべく一気に駆け出す。阿野もすぐさま横に並んで、二人で軒先に飛び込んだ。

本当は自分の家まで走ろうかと考えたのだけれど、まだ些か距離がある上に降雨量はどんどん激しさを増している。

結果、数メートルを走っただけでずぶ濡れになってしまい家までどころの話ではなくなった。髪がすごく重い。私でさえそうなのだから、阿野は輪をかけて重くなっているのではないだろうか。

そう思い阿野を見ると、髪より眼鏡が大変そうだった。制服もずぶ濡れならポケットに入れていたハンカチもようするにはずぶ濡れなわけで。

「うぅ……前が見えないよ」

「はい、タオル」

持っていたスポーツタオルを鞄から取り出して阿野に渡す。比奈用に持ってきていたのだけれど、念のため2枚持っていたから1枚はそのまま鞄に入れっぱなしだった。供えあれば憂いなしってところかしら。もちろん比奈にはすでに渡してある。この雨だと室内で筋トレになっただろうから少し退屈しているかも。

言葉少なに不服そうにしている幼馴染の姿が思い浮かび、思わず苦笑が漏れる。帰ったらあの子の大好きなお肉でご飯を作ってあげよう。

「天気予報は雨だなんて言ってなかったのにな～」

取り留めなくそんなことを考えていると、眼鏡を拭き終わった阿野がしかめっ面で暗雲を睨みながらそうぼやいた。

確かに洗濯物は全滅しただろうし、不意の雨の厄介さには私も同意する。でも、ぼやいたからといって雨が止むわけでもない。

「外れることもあるわよ。雨だってわかってたら傘持ってきたの？」
「あはははは～。……もちろん！」
「本当は？」
「嘘です。ごめんなさい。自信ないです！」

胸を張って言う阿野に苦笑しながら、お互いの髪や鞄の水滴を拭う。
春から夏に移り行く季節で、雨足は濡れて風流と言える春雨とは程遠い。
暫くはここから動けないかも。
幸いにも空き家みたいで、室内の電気が点く様子もないので、せめて小雨になるまでは避難させてもらおう。早く帰りたいけれど、鞄の中まで濡れたりしたら目も当てられなくなるし。課題プリント、無事でよかった。
予想以上にずぶ濡れになってしまったから完全には拭き取れなかったけれど、とりあえず髪から滴り落ちる水滴はなくなった。制服は諦めるしかないみたい。肌に張り付いて少し気持ち悪いけどこれ以上どうしようもないし。帰ったらまずお風呂沸かさないと。
洗濯物は乾燥機に入れて乾かすとして、その間、阿野には私の服を着てもらうしかない。勉強会のつもりだったから阿野も着替えなんか持ってないし。
……ゆったりめの服あったかしら。
「えっと、結奈？　なんか目つき怖くない、かなぁ……なんて」
「なんでもないの。ただちょっと凹まないかと思って」
「何がかな！？」
言いながら自分自身を抱きしめるようにして胸元を隠す阿野。わかってるんじゃない。私がそこから視線を離さないからっていうのもあるんでしょうけど。
「まあ、冗談はこのくらいにして」
「目が本気だったよ！？」
「……気のせいよ。カーディガン絞れそうよね、これ」
「あからさまに話題逸らしたよね！？」
「続けましょうか？」
「わあ、ほんとだ。絞れそうかも。道理で重いと思ったよ～」
至極自然に続けようとすると、阿野は不自然なまでにくるりと回ってカーディガンの裾を掴んで私から視線を逸らした。

阿野のカーディガンの色がいつもより濃くなっているのは水分を多分に吸っているからだろうし、本当に重かったのは間違いないと思う。思うし、先に話題を逸らせたのは私だけれど、仄かに顔を赤くした阿野が私から少し離れたことが釈然としない、というか。

……何考えてるのよ、私。

「結奈さんや。絞った方がいいかな、これ」

「え、あ、そうね。あんまり濡れてるのもよくないと思うし」

「だよね〜。うう、早くお風呂入りたい」

あ、お風呂貸してもらっていいかな？　と、カーディガンを脱ぎながら阿野がこちらを見る。もちろん構わないというか、むしろ帰ったら強制的にお風呂に押し込むつもりだったんだけれど。

ぎゅうっと阿野がカーディガンを絞ると水滴が少し滴り落ちた。

雨はまだ止む気配はない。天気予報はこの雨のことを言っていなかったから、おそらく通り雨だと思う。すごい集中豪雨だけど。バケツをひっくり返したような大雨っていうのかしら。

視界には誰もいない。というか、軒先からは滝のように激しく雨水が降下してきているし、一寸先も見えない。

帰宅時間が中途半端だったからか私たちの他に雨宿りをしている人もいない。この場所以外にこの辺りで雨宿りを出来るところがあるのかはちょっと覚えていないから、断言はできないけど。比奈みたいに部活をしている人たちはまだ学校だろうし。

黒い雲の下で鋭く叩きつける雨と、雨の独特なにおいの所為か、世界から切り離されたような感覚に陥る。

私と、阿野しか、いないみたいな、そんな錯覚。

「結奈？　どうかした？」

少し開いた距離を、触れる寸前まで詰めると阿野が不思議そうな声を上げた。

カーディガンはまだ手に持ったままで、羽織ってはいない。濡れたカーディガンを着ていたのだから、中に着ていたシャツも少し濡れていて、いつもは見えない阿野のスタイルの良さが凄くよくわかる。

えっと、その下の、ピンクの、色、とか、も。

「ゆゆゆ、ゆゆ　ゆっ　結奈！?」

「……その、ごめんなさい。つい」

「つ、つつ　つい、って！　ゆ、結奈ってそんなキャラだっけ！?」

腕の中で慌てふためく阿野を、言葉とは裏腹に少しだけ力を込めて抱きしめ直す。

阿野の中の私像がどうなっているのかは知らないけれど、確かに「つい」で抱きしめるのは私らしくはないかも。

「……つい、よ」

「えぇ！？　貫き通しちゃうの！？　だ、誰かに見られるかもですよ！？」

「見えないわよ。この雨だもの」

出来るだけ自然に聞こえるように出来るだけさらっと言う。

見えないのはほぼ間違いないと思うけれど、でも阿野の下着、とか、誰にも見せたくないじゃない。さっきは他の誰もいないとか考えてたくせに、矛盾した言葉だとは自覚してるけど。

「でも、だって、えっと、だから」

至近距離で見つめると、真っ赤な顔をした阿野が更に挙動不審になった。そんな姿も可愛いと思うなんて、本当にいつから私はこんなキャラになったのかしら。

「阿野」

「へ、あ、な、何かな！？」

「目尻に睫毛ついてる。取ってあげるから目瞑って」

「え、あ、うん」

焦って周りが見えていない状態になっている阿野は、急に話題を変えた私を不審がる様子もなく素直に目を瞑る。

私以外にそんな顔見せちゃ嫌よ？

我が儘な台詞は言外には出さず飲み込んで、赤くなった頬にそっと手を当てて、何も言わせないよう阿野の柔らかさを堪能した。

嘘とみきまき。

環月紙袋

ちゅ。

嘘かあ～
うう む
どうしたの桐？

実はわたしはメガネをはずすと目が3になる！
の〇太か！

実は月代ちゃんは童顔じゃなくて幼女だった！
でも月代ちゃんはちびっこ先生なのがスバラしいよね！
ちゃんと大人です！

あ

嘘とつくきり。
環月紙袋
ふんすっ
ひょっ

届かない日々

橘

一

私だって、いい加減子供じゃないんだから、そんなことわかってる。世の中、自分ではどうしようもないことばかりで。
わかってた、つもりだった。知らなかっただけだった。
本当にどうしようもないことを――。

遠くで恵の泣く声がする。
どうにもならないことなんていくらでもある。理系の点数はちっとも上がらないし、球技全般はまるでダメだ。それでも、日常生活に支障を来したことなんてない。
私は、状況がわかっていないであろう、傍で呆然と座っている比奈を見た。比奈は、ぱちくりと瞬きをしているばかり。何か言わなくちゃ。
中学三年のときに起きた、あのことだってそう。その後ずっと人を避け、自分からも目を逸らせていた。だけど、今では比奈や阿野、まわりの皆に、そして何よりも、サチさんと恵のおかげで、ようやく向き合うことが出来た。
私の肩にそっと手が置かれた、そんな気がした。それはきっとサチさんの手なのだろう。
ぐらぐらと地震が起きているわけでもないのに、自分のまわりが揺れている。ああ、これは目眩だ。そう考えられる程度に私の頭は働いている。けれど、それに何の意味があるのだろう。
思えば、気付く機会なんていくらでもあったはずだ。どうしてそれを確認しなかったのか。多少怖いけれど、そうすれば今のこの状況を回避出来たのではないか。
いや、違う。そうじゃない。
ぐるぐると回る視界から逃れようと、ぎゅっと目を閉じる。けれども、頭がゆっくりと揺さぶれている、この奇妙な感覚は無くならない。
同じなのだ。事前に分かるか、そのときになって初めて分かるか。ただそれだけの話。
周囲がぐわんぐわんと回る。回り続ける。
どうしようもないこと。
そのフレーズが私の頭を占拠する。
恵も、そしてサチさんも。比奈に取り憑くことが出来ない。
その事実をいつ突きつけられるのか。それだけの話なのだ。

肌寒い朝。私は比奈と一緒に学校を後にする。
結局、あの後は何も出来なかったので、そのままお開き。私と比奈は二人、「あのこと」のために準備された布団で眠った。文字通りの意味で。そのときは、ただ現状から逃げるように、眠りに意識を明け渡そうとしていたように思う。
比奈の手が温かい。こんなとき、比奈が居てくれて本当に良かった。不安で不安で溺れそうになっている今、この小さな手が私の命綱のようなもの。
「比奈、寒くない？」
「……ん。だいじょうぶ」
「うん」
そう言う比奈が愛おしくて、私は目を細める。
「……ごめん」
小さく呟く比奈の声に、はっとした。この子は、この子なりに気にしていたのだ。そんな当たり前のことにも気が回らないなんて、どうかしてる。
私は、比奈と繋いでいた手を離す。比奈を見ると、不安そうな目で私を見上げていた。そんな比奈の頭を優しく撫でる。落ち着かせるようにゆっくりと。
「比奈が気にすることじゃないのよ」
そう、比奈に落ち度は無い。よく確認もせずにあんなお願いした、私が悪かったのだ。
「……ん」
頭に置いた指を動かすと、比奈がくすぐったそうな声を出す。
「帰ったら、朝ごはん、食べましょ。おなかすいてる？」
「ん」

比奈がいつも通りのに返事をする。
それがおかしくて、私は短く笑う。
「そうね。ちょっと早いかもしれないけど、帰りましょ」
そうして再び無言で二人歩く。けれど、先ほどまでの寒々しさは感じない。比奈の温かさが私の心に染み入るような、そんな心地よい沈黙。
「ありがとう、比奈」

「やっほ、結奈。おはよう！」
「あ、阿野」
創立記念日の休みも明けた、金曜日の朝。
教室の椅子に座り、朝のホームルームまでの間、一限目の教科書を軽く読んでいると、阿野の挨拶する声が聞こえた。
阿野は私の声を聞くなり、ずいっと私に顔を寄せた。反射的に私は上体を反らして逃げようとする。
「何か、あった？」
私は顔に出やすいのだろうか？　それとも阿野が人並み外れて鋭いのか。
「……あったわよ」
この子に隠し事は出来そうにない。気を遣われるのも嫌なので、私は素直に認めることにした。
「何処か人の居ないところに行こうか？」
「ちょ、ちょっと待って。もうすぐホームルーム始まるから」

「そっかー。上手くいかなかったか」
「……うん」
お昼休みの屋上。もう十一月。風が吹けば肌寒く感じる季節であり、天気がいいわけでもないので、屋上には私と阿野、それにサチさんと恵を除けば、ほとんど誰も居なかった。
ベンチでお昼を食べながら、私はあの日のことを話した。
「それで、この後どうするの？」
阿野がお茶のパック片手に、そう訊いてきた。
私が上を見上げると、サチさんが何か考える仕草。

「そぉねえ。残念だけど今のところ何も思いつかないわね」
「今のところ、どうしようも無いみたい」
サチさんの声が聞こえない阿野に、そう解説してあげる。
「あ、大丈夫だよ。頑張れば聞こえなくもないから」
「そうなの？」
その言葉に少し驚いた。阿野はぼんやりと見える程度と言っていたから、声は聞こえないものだと思っていた。
「少し集中すれば、だけど。コツがあるんだよね」
「そんなものなんだ」
「そんなものみたい。……で、結局、結奈みたくサチさんたちが見えるような人じゃないと、取り憑けないみたいなんだよね？」
「ええ、比奈ちゃんも見えれば良かったんだけど……」
そう呟くサチさんの声に、私ははっとする。
「ねぇ、阿野。変なこと訊くけど、阿野って、その、見えるのよね？」
「えっ？　何、急に改まって」
「さっきコツがあるって言ったじゃない？　それを比奈に教えてくれない？」
私の言葉に、虚を突かれた顔をする阿野たち。もしそれが出来るのなら、私と比奈で、もう一度挑戦できる。正直、積極的に挑戦したくはないけれど。
「……結奈さんらしからぬ発言だねぇ。でも、結奈の方が幽霊さんをちゃんと見えてるんだから、結奈が教えたほうがいいんじゃないかな？」
「私は、たまたまよ。たまたま、サチさんと恵が見えるだけ」
「あたしだってたまたまだよ。たまたま色んなものが見えるってだけで」
「でも、子供の頃からなんでしょ？　だったら私よりも詳しいかなと思ったの」
「んんん……」
阿野が両腕を組んで唸りだす。それから少し溜息。
「まさか、あたしの霊能力？　みたいなのが活躍するときが来ようとはねー。と言いたいところだけど、正直難しいと思うよ。あたしも、

見やすくなったり、見えなくするってコツはわかるけどさ。それって見えない人を見えるようにするコツじゃないわけだし。それに、そういう感覚的なものって伝わらないじゃない？」

とりあえず阿野の「コツ」を聞いてみたけれど、阿野の言ったように、何をどうすればいいのかさっぱり分からなかった。

「ふぅ、ゴメン。私もちょっとヘンになってたみたい」

「ううん！　全然、全然いいよ！　結奈にしては、ちょっと珍しいなと思っただけ。……それにしてもさ、あたし幽霊って霊感無いヒトのほうが取り憑きやすいのかと思ってた」

確かに言われてみればそんなイメージがある。私は隣に居るサチさんを見た。

「私たち、結奈さんにしか取り憑いたことがないから。そもそも人に取り憑こうと考えたこともなかったし」

「……いいヒトなんですね」

「そお？　ありがとう、阿野さん」

阿野がサチさんと直接会話しているのを見て、奇妙な感覚に襲われる。私も傍から見れば、こう見えるのか。

「ねえ、サチさん。あたしに取り憑いたり、出来るかな？」

「やってみないと分からないけど……」

そう言われて、サチさんは阿野の隣に座る。そして、阿野の背中から覆いかぶさるように抱きついた。

「これ以上は無理そうね」

と、阿野の肩越しに話すサチさん。どうやら、阿野のように幽霊が見える子でも難しいようだ。

それにしても阿野には、サチさんがどう見えているのだろう。少し困ったような顔をしている。

「結奈ー。やっぱりちょっと怖い」

そう言って、サチさんごと私に抱きついてくる阿野。

「怖いなら、やらなければいいのに」

「いやあ、興味があ――」

阿野が私に触れた瞬間、阿野の言葉が止まる。

そして、次に阿野の口から出た言葉に、私はどんな顔をしただろう？

「結奈、さん？」

どうして、どうして阿野なの。

二

わたしはいつまでも子供のままで。

幽霊になっても、それは変わらなくて。

ずっとずっと、わたしは前に進めない。

喉の奥から嗚咽が止まらない。泣いたら駄目なのに。

サチさんが、心配そうにわたしを見る。そんな顔させたくないのに。

わたしはサチさんに連れられて、屋上に出た。夜の風が、泣いて火照った頬を冷やす。実際、そんな感覚は遥か昔に失くしてるけれど。

「恵。落ち着いた？」

サチさんの優しい声がした。

「大丈夫、です」

鼻声だったけど、何とか声が出る。

屋上のベンチで二人。わたしはサチさんの肩に頭を乗せていた。

静かな夜。さっきまでの色んなことが遠い出来事のように思える。

「ねえ、サチさん」

これ以上黙っていると、余計にサチさんを心配させてしまいそうだったので、わたしはいつも通りのトーン――いつも通りに聞こえたらいいのだけど――で、サチさんに話しかける。

「なぁに？」

「これから、どうしましょうか」

「そうね……」

上手くいかなかった初体験。それだけ聞けばよくある話なんだけど、わたしたちにとってはそんなに軽いものじゃない。崖っぷちに立たされたようなものだった。

しばらくして、サチさんは少し困ったように笑いながら、こう言った。

「私ね、別にしなくてもいいんじゃないかって、そう思うの」
一瞬、サチさんが何を言っているのかわからなかった。
「結奈さんのおかげで、恋する子たちを後押ししてあげることも出来たし、色んなことが出来た。だから、もう潮時なのかなって」
それを聞いて、わたしはサチさんの肩から離れる。
「でも！　ずっと、ずっとわたしたちの目標だったじゃないですか！」
「そうね。でも、それは望み過ぎじゃないかって、思うの。……だって私たちはもう、生きてはいないのよ」
「そんな……。わたしたちは、普通のヒトと同じことを望んじゃいけないんですか。サチさんだって、生きてた頃にやりたかったこと、いっぱいあったはずです。　それを、やりたいと思うことが間違ってるんですか！」
「間違ってはいないわ。けど、やりたいことなんてきりが無いし、それに幽霊になったからこそ、出来るようになったことだってあるのよ。例えば……そうね。恵、貴女に会うこととか、ね」
「その台詞はずるいですよ。サチさん」

サチさんは優しい。三十年前のあの日からずっと。
だけど、わたしはサチさんに何かしてあげることが出来ただろうか？　ずっと、サチさんに甘えっぱなしじゃなかったのだろうか。わたしだって、大好きな人に何かしてあげたいのに。
思えば、子供の頃からずっとそうだった。ずっと、親や周りの人に迷惑ばかりかけて。
幽霊になってからも、サチさんに迷惑ばかりかけているんじゃないか。サチさんはきっとそんなことないと言ってくれるけど。
サチさんに守られるばかりじゃ嫌。サチさんの頼りになる存在になりたい。ずっとずっとそう思っているのに。
だから、サチさんがあの子に取り憑けるのが分かったとき、こう思った。
「見つけた」

放課後の教室。結奈が一人、ぼんやりと座っていた。

「結奈？」
わたしの声に驚いたようで、結奈は目を見開いていた。
「びっくりさせないでよ」
「結奈がぼけっとしてるのが悪いんじゃない」
「まあ、そうだけど」
そう言うと結奈はばつが悪そうな顔をして、わたしから目を逸らす。
入り口から歩いていき、お行儀が悪いけど、わたしは結奈の前の机に腰を下ろす。
「どうしたの？　恵一人で」
「あのさ、お願いがあるの」
わたしは一呼吸おいて、言葉を続けた。
「また、試して欲しいの。阿野ちゃん、だっけ？　あの子と結奈で」
「はぁ？」
さっきとは明らかに違う表情で驚く結奈。まあ、そうでしょうね。言ってるわたしでも、とんでもないお願いだって、わかってるもの。
「さすがに、それは無理」
「比奈ちゃんのこと、気にしてる？」
結奈はそれには答えないけど、そうなんだろうな。
「大丈夫よ。しっかり取り憑いたら、結奈たちの意識は無くなるんだから。知ってるでしょ？　体を一時的に貸すだけ、たったそれだけのことって考えてよ」
「そういう問題じゃない！」
結奈が机を叩く音。見れば、怖い顔をした結奈。今まで何度かからかって怒らせたことはあったけど、ここまで怖い顔をしたのは初めて。
「……まあ、そう言うと思ったけどさ」
「だったら訊かないで。……ゴメン。言い過ぎた」
「じゃあさ、わたしたちどうしたらいいと思う？」
そう言われて、黙り込む結奈。手を口元に当てる、いつもの仕草で。
「あと一年と少し。結奈の受験とか考えるともっと短いのかもね。こうやって、結奈と過ごす時間も。もうあまり時間が残されてるわけじゃないのよ。特に、サチさんにとっては」
「どういうこと？」
結奈が訊き返す。

「校舎が建て替えられれば、わたしたちはもう入れなくなるのは知ってるでしょ。奥校舎はまだだけど、結構古いし、いつまでもあるわけじゃない。もし、奥校舎が建て替えになったら、それだけでサチさんの居場所はほとんど無くなっちゃうの」

口からでまかせだった。だけど、そこまで間違ったことは言っていない、はず。

「結奈。結奈だって、サチさんにはお世話になってるはずよ。だって、わたしたちと会う前と今じゃ、全然違うもの」

これも嘘。本当に助けてもらったのはわたしたちの方。だけど、こう言ってしまえば、この子は納得するだろう。

――これくらいしか出来ない自分が歯痒くて堪らない。わたしは結奈のように気も利かなければ、そつなく物事をこなす器用さも無い。出来ることといったら、こんな風に嘘をついてワガママを言う、そんなことくらい。

わたしは何も出来ない。サチさんに何もしてあげられない。

「……ずるい」

「え？」

結奈がそう聞き返したが、それはわたしも同感だった。自分で、どうしてあんなこと喋ったのか分からなかった。そして、続く言葉を抑えることも出来なかった。

「ずるいって言ったの！　あんたが！」

かっと頭に血が昇って、目元が熱くなる。

わたしはとっさに目をぎゅっと閉じて泣きそうになるのを堪える。泣いてもどうにもならない。何も解決しない。そんなこと分かってるのに。

しばらくそうしていると、結奈が立ち上がって、わたしの傍に立った。

わたしは、大丈夫だからと結奈を手で制して、先の言葉を続けた。

「あんたは生きてるし、わたしたちと話も出来る。わたしに出来ないこと、何だって出来る。だから、羨ましいのよ」

うん。わたし、結奈が羨ましい。憎らしいと思ってしまうほど。

「わたしはね、サチさんがいるから、ここにいるの」

そう、サチさんに会うために無理をして死んでしまった。だけど、後悔なんてしなかった。だって、あの日々だけだったもの。生きてよかったと本気で思えたのは。

「サチさんの傍で、サチさんの望むものをあげたいの」

サチさんがそうしてくれたように。

「そのためだったら何でもする。貸せる体があるのなら、いくらだって貸す。ずっと欲しいというのなら、わたしの体をあげる。だけど、わたしには何も無いの。食べ物を作ってあげる手も、サチさんに触れられる体も、何一つ無いの。だからもう、結奈に頼むしかないの」

わたしはそこまで言うと、ゆっくり深呼吸して心を落ち着かせる。これ以上余計なことを言わないように。

何をしてるんだろう。本当はどうにかして結奈を説得するつもりだったのに、いつの間にか自分のことばかり喋ってしまった。

もう、止めにしよう。

「つまんない話しちゃった。今の話は忘れて」

わたしは結奈に顔を見られないように振り返り、教室を出る。

「恵っ！」

入り口に差し掛かったとき、後ろから声がした。

「……わかった。でも、阿野が嫌って言ったら、この話はおしまい。いいわね？」

その言葉にわたしは目を擦りながら、小さく「ありがとう」と言った。

「――あ、サチさん、ちょっと待ってください」

そう言うとわたしは榎の幹から離れ、結奈に近づく。

あの放課後から数日後、結奈が阿野ちゃんにお願いしてくれた。内心無理そうだなとは思っていたけど、意外なことにあの子も協力してくれることになったのだ。

で、そのままとんとん拍子で準備が整って。

結局、またわたしは傍から見てるだけだった。

それはやっぱり悔しいけれど、サチさんの願いが叶ったのだから、わたしも満足すべきなのだろう。

「結奈、色々ありがとう」

「……うん」

複雑そうな表情の結奈。それを見て、胸がちくりとした。
「ねえ、結奈。何であのとき、阿野ちゃんに頼むって言ってくれたの？」
「何でだろ……。恵の気迫に押されたというか、恵がどれだけサチさんのこと想ってるか知っちゃったから、かな」
結奈のその言葉に、少し救われた気がした。
わたしは、サチさんや結奈みたいに強くはなれなかった。けれど、わたしのしたことが無駄じゃなかったって、そう言ってくれたような気がして。
「ありがと……。あとさ、最後に一言言わせて」
一応先輩だからね。
頼りない先輩から、強くて頼もしいけど、気苦労が多そうな後輩に一言。
「あんたはもっとワガママになりなさいよ」
そう言って、わたしは結奈に精一杯の笑顔を見せた。
それじゃあね。ばいばい。

三

初めて会ったとき、この子と友達になりたい。そう思った。
あたしは小さい頃から内気な上に赤面症で、一度顔が赤くなると、汗はひかないし、頭は混乱するしで、人が怖くて堪らなかった。
でもそれじゃダメだって思って、あたしなりに色々努力してきた。バイトに行くことにしたり、ノリの軽いキャラを作ったり。
その甲斐あってか、今はそれほど酷くなくなったように思う。だけど、親しい友達以外の子と話すときは、やっぱり緊張してしまうのか、後でどっと疲れが出てしまう。
こんなあたしだから、特別仲の良い友達、なんていうのは結構少なくて。結奈はその一人、というか一番の親友だ。
だけど、どうしてだろうか。最近、結奈を見ていると、酷く落ち着かなくなる。
「何だろうな」
一人でぼんやりしているとき、ふとそんなことを考える。
確かに結奈、色々変わったもんな……。
幽霊が見えるようになったり、比奈ちゃんと付き合うようになったり。
それに何よりも。
「そういえば、遠見さんって何者なの？」
「ん？　結奈がどしたの？」
「夏合宿のとき、凄かったんだから」
「あー、あれは確かにすごかった」
いつものように桐とねなとゲームをしていたとき、そんな話になった。
結奈はそういった話、全然しないから、桐たちから聞かされた結奈の活躍には驚かされた。
確かに夏休み以降だろうか、結奈に声を掛ける人が増えたと思う。結奈も結奈で、何て言うのだろう、他人に対して心を開いた感じになっていて。
結奈が変わっていく。それは良い事だと思う。今までの結奈は時々辛そうな、そしてそれを見せまいと無理してる節があったから。
だけど、それを素直に喜べない自分がいる。
「阿野、どした？」
ねながリモコンで映画を停止させる。あたしの部屋のテレビが、DVDのメニュー画面を映し出す。
「ん？」
「いや、あんま集中してないなー、って思って」
あたしは傍にあったクッションをぎゅっと抱きしめる。
「んー、そうかも」
それを聞くと、ねなはテーブルのコーヒーカップを手に取り、一口すする。
「……話、聞くけど。言いたくなかったら別に話さなくてもいいし」
「ん、ありがと」
と言っても、どこから話せばいいのかわからない。それが分からな

いからモヤモヤしてるわけなんだから。
「……結奈、最近変わったよね。何と言うか積極的になったっていうか」
ねなは視線を天井に向けて、何か考える仕草。
「うーん……。あたしは結奈との付き合い短いから、その辺よく分かんないだけどさ。元々そんな人だったんじゃない？」
「え？」
「夏合宿のときの結奈のことは前に話したでしょ？　慣れていないと、ああいう動き方出来ないと思うんだよね」
「……そうかもね」
「阿野？」

結奈とあたしは似たもの同士なんだって、勝手にそう思ってた。
だけど、そうじゃなかった。
「阿野ってさぁ、何かイラつくよね」
いつだっただろう、クラスの子が陰でそう言ってるのを聞いたのは。
小学生中学生のころ、人と話が出来ないあたしは、周囲からずっとそんな目で見られてた。嘲笑、蔑み、見下した視線。あの目が嫌い。
息が出来なくなる。酸素が足りなくて、頭ががんがんする。
今でも思い出してしまう、あの感覚。もう二度と味わいたくない、思い出したくもないのに。
だからあたしはあたしなりに努力して、やっとの思いで普通っぽく出来るようになったのに。
気付けば、あたしの隣にいるはずの結奈が、あたしの遥か先を歩いてた。そして、きっとあたしは結奈に追い付くことは出来ない。そう悟ってしまった。
――あたしは、結奈とあたしは似たもの同士なんだって、勝手にそう思ってた。
結奈は、あたしのこと、どう思ってたのだろう。ねぇ、結奈。何であたしと友達になったの？
だから、結奈からあのお願いをされたとき、あたしはこう答えたの。
「いいよー」

予想外の答えに戸惑う結奈。
そうでしょうね。結奈はあたしが断ることを期待してたんだから。そんなことくらい、あたしだって分かる。
「え？　どういうことか分かってる、のよ、ね？」
「分かってるよ。あたしと結奈が少しの間だけ体を貸すってだけなんでしょ？」
あたしはダメ押しで結奈の傍にいるオレンジ色の幽霊さん――確か、恵さんと言ってたっけ？――に向けて話しかける。
「大丈夫だよね？」
それに答えたのだろう、オレンジ色の塊がわずかにゆらめいた。
その様子を見て、あたしは少し目を細めると、再び結奈に顔を向ける。
「それに、結奈のお願いだから。あたし、結奈が友達でホントに良かったって思ってるの。でも、ずっと結奈には助けられてばかりだったから、そのお返し」
その言葉に嘘は無い。あたしの本当の気持ち。
だけど、それだけじゃないの。

教室に入ると、結奈は既に席に着いていて、いつものように一限の準備をしていた。
「あ、結奈だ。おはようー」
あたしは、いつも通りの調子で結奈に挨拶する。
「あ、阿野。おはよ」
自然にそう返す結奈。だけど、目線は微妙に外してて、決してあたしに合わせようとはしてくれない。
それを見て、あたしは安心する。結奈は繊細なタイプだから、きっと気にしてくれると思ってた。

――あのあと。
少し後悔もあるのだろう、青白い顔をした結奈に、あたしはさも屈託なさそうな素振りでがばっと抱きついて。
「おつかれ、結奈。どうだった？」
「あ、うん。お疲れ様」

「それにしても、取り憑かれるってああなるんだねー」
「……あ、ゴメン。もしかして嫌だったりした？」
「ん？　いや、そんなことはないけどさ」
「そう……」
「でもさ、結奈」
「え？」
笑っちゃいけない。自然に。自然に、あたしはあなたに棘を刺す。
「今日のことは、比奈ちゃんには内緒にしときなよ。大丈夫だとは思うけど、結奈とも比奈ちゃんとも今まで通りでいたいからさ」
ゆっくりと、結奈の皮膚が破れる。肋骨の隙間を抜けて、結奈の胸の奥に、深く――。

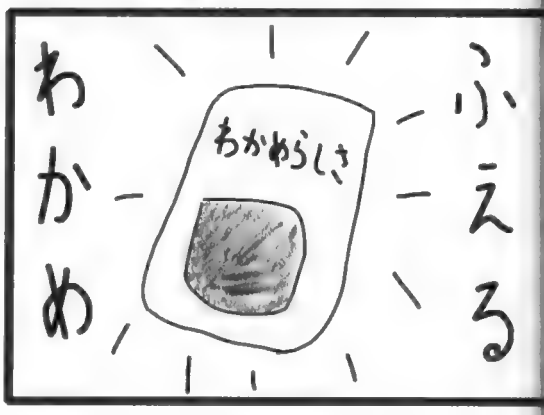
結奈は、あのこと、比奈ちゃんどころか誰にも言えないだろうな。墓場まで持ち込む、までは無理だろうけど、当分は一人で抱え込むんだろうな。
比奈ちゃんと結奈が一緒に居るところにお邪魔したいな。結奈、どんな顔するんだろう？　それよりも、結奈が比奈ちゃんとするとき、どんな気持ちになるだろう？
今まで、正しく綺麗に生きてきたあんたは、もう何処にも居ないの。ねぇ結奈、どう思う？
自然と口角が上がってしまっている事に気付く。それを周りの子たちに気付かれないよう、あたしは手で口元を隠す。
もし、もしも結奈が図太くて、あたしが所々に散りばめた悪意になんて気付かないような人だったら。
きっとその方が、ある意味幸せなのかもしれない。結奈も苦しまないだろうし、あたしも結奈を嫌いになることが出来るのに。
結奈はあたしの、大切な友達。
綺麗で、強くて、優しくて、あたしの欲しいものを何でも持っていて。本当はあたしなんかと交わることもない人で。
そんな結奈が眩しくて、憧れてて、大好きで。
だけど同時に、そんな結奈が憎くて、傷付けてやりたくて。
……完全に歪んでるな、あたしは。
いつか、こんな思いは消えてなくなるのだろうか？　結奈をただただ親友として尊敬して、信頼して。他には憎しみも悪意も何も無くて。
そんな時は来るのだろうか？
もしもそんな時が来るのなら、あたしは結奈にこう言いたい。
あたしは結奈のこと好きだったけど、大嫌いだったんだよ。結奈みたいな子になりたかったんだよ。馬鹿みたいだよね。
二人でお茶でも飲みながら、何でもない話のように。
いつか、そんな時が来るのなら――。

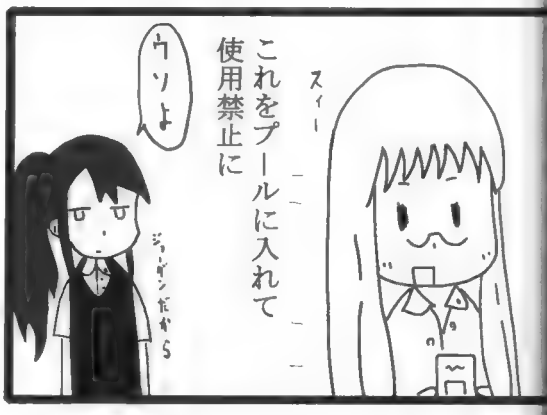
ガラッという大きな音を立てて、引き戸が閉じられる。
担任が教卓に上がる。
起立。礼。着席。ホームルームが始まる。
一日が、始まる。

おおよそ百合霊さん

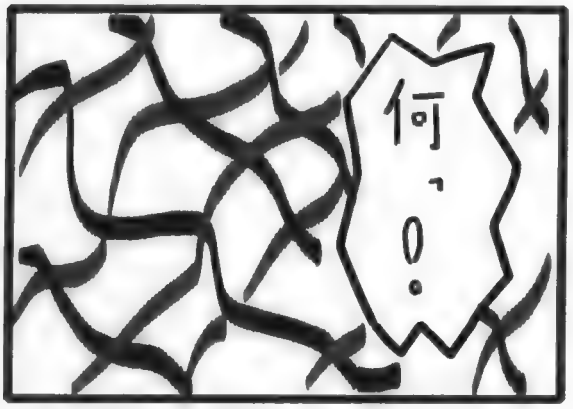
都塚ムラサキ

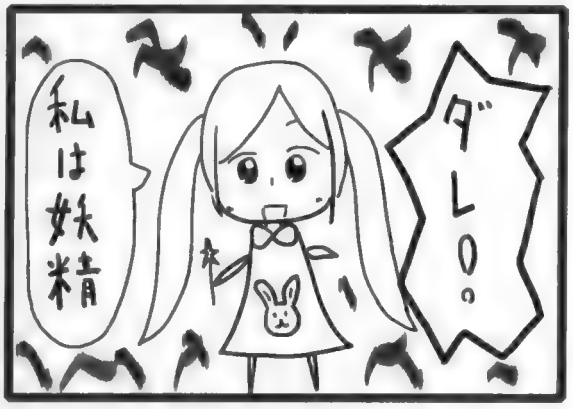
実際にあったそうです





夜遅くまで月代ちゃんとメールしてました





「ん？このチョコはみんな、陽香あてか？」

「し、仕分けしてんだ！ん、んなワケねーべ！
ストマグの他の奴らの分ばっかだって！」

by SATOKO MIZUGUCHI (CHRISTMAS GARDEN)

嘘と真と笑顔の理由は

九夏

「また比奈のとこ？」
お母さんの言葉に一瞬だけどきりとする。けど、それはいつか聞かれるだろうと前から予想は出来ていたから。私は特に慌てる事もなく答える。
「うん、阿野から借りたゲームとかするし。別にうちでしたって良いけど、テレビ独占したり騒いだりしたら鬱陶しいとか言うでしょ。今日もそのまま比奈の所に泊まるから」
「まあそうなんだけどね。明日休みだからって夜更かしするんじゃないわよ？」
「分かってるわよ。ね、比奈？」
「んっ？…ん」
隣で黙っていた比奈の頭をぽんと叩くと、比奈は短く返事をした。いつも通りの言葉にしか聞こえようがないから、流石に気づかれないと思うけど。比奈は内心動揺してただろうな。余りここに長居しない方が良いかも。
「じゃあ行きましょっか」
比奈の背中を押して足早に玄関へ。泊りと言っても持っていく様な荷物はない。必要あれば取りに行けば良いし：最近は比奈の部屋に置いておくようにしているしね。パジャマとか…し、下着、とか…。駄目だ。さっきまでは平然と出来ていたのに、こう言う事を考えるだけで顔が熱くなってしまうのは防げないし慣れない。
「結奈ねぇ？」
「ひゃっ！？」
口元を手で覆い俯いていた所を比奈に覗き込まれて驚きに思わず変な声が出た。その声に比奈は目をぱちくりさせて……にっと笑う。私の大好きな可愛い笑顔で。
「ん。結奈ねぇ、今の、可愛かった」
「！？ひ、比奈…！何言ってるの、もうっ」
「へへ…だって、ほんとに可愛かったから。ん、早くあたしの部屋、行こ？」
比奈の言葉でまた赤くなって動けないでいる私の背中を、比奈は押してくれる。こういう所が頼もしくて嬉しくて。私は随分と比奈に甘えられるようになったと思う。…ううん、甘えたい、一緒に居たいってどんどん欲張りになってすらいる。だからこそ親に怪しまれるのを分かっても、比奈の部屋に泊まったりしているんだし。
百合霊の二人と出会って多くの人と出会い、そして大切な人が出来た。それは私にとって宝物なのは本当。一緒に話したり遊んだり、全てが楽しいのも。でも比奈と二人きりになれる時間が、中々取れなくもなってしまって。私達は互いの両親が不在になるのも待てなくなり、こうして両親が不在の方へと理由を付けて泊まって過ごす様になった。
付き合っている事は勿論、そんな理由で泊まりに行っているなんて今は正直に言うわけにはいかない。そこには当然後ろめたさとかを感じるべきなんだろうけど…。不思議と比奈の部屋に行く私と比奈の表情には、笑みばかり浮かんでいた。
比奈の部屋に入ってひとまずベッド際に腰かけると、比奈も隣にぴょこんと座ってすぐさま私に抱きついてくる。
「結奈ねぇ」
「どうしたの？」
「んー…こうしたいって、さっきから思ってたから」
「そっか」
比奈の背中に手を回して頭を撫でると、胸元に比奈が頭を擦り寄せてくる。ずっと昔からの仕草なのに、普段と変わらぬ返事とは裏腹に、私の胸はどきどきしっぱなしだ。その胸の高鳴りは、恥ずかしさと、確かな喜びを伴うもの。そんな温かい気持ちと、それをくれる比奈が好きでたまらなくて。胸元の比奈を見つめながら頭を撫で続けていると、比奈がそわそわと落ち着かない様子でこちらを見上げてきた。
「ん…結奈ねぇ。腕枕、したい」
「えっ？う、うん、良いわよ？」
「やた！ありがと、結奈ねぇ」

突然のお願いに少し驚いたけど、最近の比奈のお気に入りだもんね腕枕や膝枕。私はベッドの端へと這っていき横になると、腕を差し出して比奈を呼ぶ。素早く私の腕に頭を乗せた比奈は、満足げに腕に頬を寄せてこちらを見上げてくる。

その仕草も、抱きしめていた時よりも間近に見える表情も…好き、と思う間に。自然と身体は動いて、空いた手で比奈の頬に手をあてると、その顔を自分へと引き寄せていた。

「!ゆ、結奈ね…ぇ…」

比奈が反応するよりも前にキスをする。驚きで頬に添えている私の腕をぎゅっと掴む比奈。一旦顔を離して比奈を見ると、比奈は真っ赤な顔で目を丸くしてこちらを見ていた。それがまた可愛くて、私は頬を緩ませて言う。

「比奈…もう一回、ね?」

「え…あ。ん…んっ」

比奈の頬を撫でてもう一度キスを落とす。比奈は私の腕をまた握るけど、今度は緊張しているような力の強さではない事に安心して、私は何度も口づける。満足した所で唇を離して目を開けると、ほう、っと息をつく比奈と目が合った。比奈は恥ずかしいのか目を泳がせていたけど、少しすると私と比奈のおでこをくっつけて真っ直ぐと見つめると言った。

「結奈ねぇ、急に、ずるい…」

「比奈だってたまにしてくるでしょう?」

「そうだけど……んん…んー」

「わっ、もうくすぐったいわよ」

納得いかないのか比奈はほっぺたを私のに擦り寄せてきて、それがくすぐったくて笑う。比奈もそうしている内に気が収まったのか、鼻と鼻がくっつくぐらいの位置まで顔を離すと、笑って言った。

「ん。さっき、どきどきしたね」

「さっき?」

「千佳さんに、また?って言われた時」

「ああ…比奈も?」

「えっ、結奈ねぇも?」

驚いた比奈の反応に、今度は私が目をぱちくりさせる番。

「私だってどきどきしてたわよ?そんなに意外だった?」

「んー、そう?結奈ねぇ、普通に千佳さんに答えてたから。あんまり、驚いてないのかなって」

「それは…そろそろ、お母さんから指摘されちゃう気はしてたしね。その、最近、比奈の所に頻繁に行ってるから…流石に気づかれちゃうかなって」

「そっか」

言いながら赤くなる私に、釣られて頬を赤くする比奈。んー、と言って少し考えた後、私に言う。

「結奈ねぇは、やっぱり凄いね。あたし、あんな風に上手く言えないもん」

「別に凄くないわよ。余り、嘘をつくのが上手なのも考えものだし…」

「ん…でも、皆に言っちゃ駄目なんだから。あたしも結奈ねぇみたいに、上手く言える様にならないと、いけないよね」

「え、と…」

比奈の言葉に考える。比奈は素直な子だから、上手に嘘をつく姿が想像つかない。それに私は、比奈にそうなって欲しいだろうか?……答えは、すぐに出た。

「…比奈は。今のままで良いわよ」

「ん?何で?」

「比奈の素直さが…ううん。今のまま、素直な比奈が…私は好きだから、かな」

「んっ…!?」

私の言葉を聞いて照れたのか、比奈は何も言わずに私の胸に顔を埋め、ぐりぐりと額を擦り付ける。そんな挙動も可愛くて、私は比奈の頭を撫でながら言った。

「だから、難しく考えなくて良いわよ。比奈は、比奈のままで」

「んぅ…でもそれじゃ、お母さんとかに、バレたりしない?」

「私がフォローするし、しつこく聞かれた時は…」

「時は?」

胸から顔を離して見上げてくる比奈に、私は人差し指を立てて比奈の唇に当てる。

「…今はまだ、内緒って、言えば大丈夫よ」

それは何も解決するわけではない言葉だけど。嘘を重ねるよりも、押し黙るより

by れおなるど

も、素敵な言葉に私は思えて。その理由は、言わずとも比奈に伝わる気がしていた。そんな私の想いが通じる様に、比奈の瞳は輝きを帯びている様に映る。

「内緒……結奈ねぇと、あたしだけの、秘密だから。内緒、なんだよね」

「うん」

「……ん。何か、そう言うの…嬉しい。これって、変かな？」

「ううん。私も。比奈と同じで嬉しく思っちゃうから。一緒、ね」

「ん。結奈ねぇと、一緒」

親にとって私と比奈の関係は恐らく色々と衝撃を与える程のものだろうから、今はまだ言えない、隠さないといけない。それでも、向かい合って私達が笑い合っているのは。相手が好きって気持ちが一緒だから。本当も嘘も、共有できるから。二人一緒な事に、喜びを感じて。また私達はキスをして、想いを交わす。

「ん……結奈ねぇ、大好き」

「私も。大好きよ、比奈」

「んん…ねえ、結奈ねぇ。…結奈ねぇも、最近寂しかった？」

「えっ？」

唇を離して、比奈が口にしたのは意外な言葉。寂しい、か。うん。そんな風に真っ直ぐ言われると、私も素直に答えられる。

「…うん。皆と一緒に遊ぶのも楽しかったけど、ね。比奈と一緒の…二人だけの時間、少なかったから。寂しかったわよ」

「そか。あたしも、結奈ねぇが皆と楽しそうなの、嬉しい。でも、寂しかったから、一緒だね。ん…もっと、時間一杯、あれば良いのに。そしたら、皆とも遊べて、結奈ねぇとも、もっとずっと、一緒に居れるのに」

残念そうに言う比奈が愛しい。皆比奈は余り表情が変わらないと言うけど、私にはそうは見えなくて。いつも感情のまま、表情を変化させる。そんな比奈のままで居てくれる事が、私には一番嬉しい事だから。もし今後私達の関係を隠す為に必要なら、私は嘘をつくのでも何でもしたいと思う。比奈の素直さが私を救ってくれた様に、それで比奈が守れるのなら。——比奈と、ずっと一緒に居れるのなら。

「…比奈。今度の休み。一緒にどこか、出かけよっか」

「え？結奈ねぇ、次の休みって、もしかしたら料理教えに行くかも、って……」

ぴたりと、指先を比奈の唇に当てる。黙ってじっと見つめると、比奈は口を閉じて少し考えてから、目をきらきらと輝かせ始めた。私の意思が通じるのは嬉しいけど、頬はやっぱり熱い。それに、一緒に居たいからって時間があればと約束していた事を反故にしてしまう自分に嫌悪感と、皆への申し訳なさとが胸を締め付けて。

やっぱり、と言いそうになる唇を塞ぐものは、そんな胸の内をあっという間に温かに溶かしてしまって、迷いも何もかも忘れさせてくれる。

「ん。結奈ねぇ、大好き！ずっとずっと、一番、好き」

「う、うん、私も。ひ、比奈、くすぐったいからっ…も、もう…」

言いながらたくさんのキスをくれる比奈に、嬉しいのだけど恥ずかしくて、身動きが取れずされるがままになる私。バランスが取れていて一緒に居るのが心地いい私達には、それぞれの役割みたいなものがあるのかもしれない。…だから、大丈夫よね、比奈。家族も、友達も、比奈も。大切にしたい気持ちを、忘れなければ。重ねた嘘も、いつか笑って話す事が出来る。そんな未来もあると信じても。

「んっ」

そんな風に思っていると、肩を掴まれて仰向けにさせられ、目の前には私に覆いかぶさる比奈が居て。

「ひ、な…」

「結奈ねぇ。良い、よね？」

比奈の言葉の意味に、思考は飛び、頭はあっという間にくらくらする程の熱を持ってしまう。渇く喉を動かして、ようやく絞り出されるのは。

「うん…」

か細くて頼りない、けど、期待も込められているそれだけの返事。それでも比奈には十分伝わって、比奈は私との距離を縮めてくる。

（…こんな風に比奈にリードされているなんて事は、この先誰にも言えないけど）

ぼんやり思いながら、私に触れる比奈の背中に手を回して、後はもう比奈の事だけで頭を一杯にしていくだけだった。

「結奈、ねな達とのカレー教室延期したんだって？」
昼休み。屋上でご飯を食べに行こうと、歩きながら聞いてくる阿野に、ちょっと用事が入ってと答えるとそっか～とのんびりとした声が返ってくる。阿野には本当の事、言うべきかな？でも何て言おう。比奈と一緒に居たくなっちゃって？…駄目、言える気が全然しない。
阿野と会話をしつつ、どうしたものか考えていると、階段の所に比奈と、牧さんの姿が見えた。
比奈は昼ご飯の約束をしていたからここまで来たんだろうけど、牧さんはどうかしたのかな？阿野と顔を見合わせて、二人に近づいていくと会話が耳に入ってくる。
「比奈、何かあったとかじゃないよね？」
「ん？何で？」
「いや、さっき今度の休み誘われたの、断ってたけど用事って言うだけで理由言わないの珍しいなって思ったから…わたしの考えすぎなら良いんだけど」
「んぉ？そゆわけじゃなくて…えと」
そわそわしている比奈の様子を見て、私も落ち着かない。フォローに入った方が良いかな、と行こうとする私の耳に、ふふふ、と怪しげな笑い声が届いて、はっとして振り向く。阿野は袖を口元に当てて、にやりと笑ってこちらを見ていた。
「ははぁ～ん…成程、そう言う事ですか～」
「あ、阿野…その、ね。い、今丁度阿野にはどう言おうかなって思ってた所で…」
「良いって良いって～。比奈ちゃんとデートだなんて、そりゃ恥ずかしくて誰にも言えないもんね」
「…ごめんね。皆にも、申し訳ないなって思ってるんだけど」
俯いて言う私に、阿野は何で？と首を傾げて言ってきた。
「やっぱり恋人ってさ、一緒に居たいって思っちゃうもんじゃないの？あ、あたしにはまだ分かんないけども……友達とでも、長く一緒に過ごしたいって思うんだからさ。恋人ならそれ以上なのかな～って、想像位なら、何となくつくもん」
その言葉に顔を上げて阿野を見ると、阿野は恥ずかしいのか少し赤くなって、目を逸らす。友達と、って言うのは阿野の話なのかな？そう思ってくれているなら照れ臭いけど嬉しくて。自然と口元が緩んでくる。
「阿野、ありがと」
「な、なな何を？何の事かな～？」
「ふふっ、良い友達持てたなって」
「な、何だよも～！」
「でも、そっか…そう思っても、良いのかな」
「結奈は真面目さんだなぁ。一緒に居たいからって思いからの、たまの嘘ぐらいなら阿野さんどーんと許しちゃうよ！」
恥ずかしさも開き直れたのか、えっへんと張った胸に手を当てて言う阿野を見て、私はこんな頼もしい友人を大切にしたいなと改めて思う。
「…阿野には、やっぱり今度からきちんと、比奈との事、言うからね」
「へっ？そんな別に…」
「良いの。私が言いたいから。比奈も、きっと阿野ならって言ってくれるわよ」
「も、も～…う、嬉しいけどさ、ま、参っちゃうなーもー！」
「結奈ねぇ？アノちゃん？」
「比奈」
真っ赤になって固まっている阿野の脇から、ぴょこっと比奈が顔を出す。阿野の様子を見上げて、首を傾げる比奈に話しかける。
「ちょっと阿野と話してたの。比奈は、牧さんとはもう良いの？」
「ん。結奈ねぇ、見てた？」
先程のやり取りで出たぎこちなさが心配なのか、少し落ち込んだ風になった比奈の頭をぽんぽんと撫でる。
「ん…ちょっと、びっくりしちゃった。変な事言ってないか、心配」
「大丈夫じゃない？牧さんも、そこまで厳しく追及してた様には見えなかったし」
「そかな？ん、でも最後は、結奈ねぇに教えて貰った、アレで。切り抜けたから、多分だいじょぶ」
「そう」
笑ってそう言う比奈を見ると安心して、私も笑う。と、今まで固まっていた阿野

が今度は私達を交互に見て首を傾げて言った。
「んん？アレ、と言うと？」
「えっと…」
言って良いの？と比奈が私を見上げてきたので、阿野は今度の休みの事知ってるからと軽く説明して。だからね、と。
「阿野には、今度から正直に言おうと思って」
「ん。じゃああたしも、アノちゃんには、隠し事しない」
「ひ、ひなちゃんまでっ。え、えとー…もうっ！アレって結局何なのさー！？」
比奈もさらっとそんな風に言うものだから、照れた阿野は自棄気味にアレとは何かを聞いてきた。比奈を見ると、比奈も私を見つめてきていて。にっと笑顔を私に見せる。うん、比奈もどう答えるか、私と一緒みたい。私も笑ってそれに応える。
「阿野には言うって約束だもの、ね。比奈」
「ん、アノちゃんには、教えてあげるね」
私達は見合い、人差し指を自分の口元に立てて阿野の方へと向くと。二人一緒に言った。
「内緒」
「ん、内緒！」
嘘じゃない、本当の事なんだけど。私達のやり取りを知るはずもない、そう言われた阿野はえぇっ！？と驚くわけで。
「い、言ってないよね、それー！？どう言う事なの！？あたし騙されちゃってる！？」
「ううん、これがほんとの事だよ？」
「ふふ。詳しくは屋上に上がってから説明するわね」
「えっ？あっ、ちょっ、色々な意味で置いてかないでよ二人共！」
置いていくつもりはないのだけど、呆気にとられた阿野は、私達が歩き始めた事にすぐに反応出来なくて、慌てて私達に駆け寄ってくる。そんな阿野を比奈と二人で挟んで、その手をそれぞれ取ると、のんびりと話しながら屋上まで向かっていく。
必要な嘘もあるけれど、本当を言える人も居るから。私達はこうやって笑って日常を過ごせる。ああ、そうだ。屋上で話せば、百合霊の二人にも届くかもしれない。あの二人も見守ってくれていると思えば、余計にこれから先も何とかなる気がしてきた。
屋上の扉を開くと、心地いい風が当たる。去年の今頃、とても不思議な出会いを果たした事は、今ここに居る私達しか知らない。言っても、信じてくれる人なんて居ないだろう。そう思うと、全てを受け入れてくれる友人と、恋人を持てた私は恵まれているのだと改めて実感できる。
「阿野。比奈」
「何、どしたの結奈」
「結奈ねぇ？」
振り向いた二人が愛しくて、私は二人の手を取る。
「…ありがとう」
今の私はどんな表情で、二人にこう言ってるのだろう。ぼんやりと外を眺めて物思いにふけっていた、去年の私と同じ？
…そうじゃない事は、すぐさま返ってくる二人の表情が証明してくれて。私は今日も屋上で、楽しい時間を過ごせる事に感謝できるのだった。

了

ライアー・ライアー
/西UKO

阿野、今日は忘れ物…

うむ、本日も忘れております！

なんでそう自慢げなのよ…

正常運転！

一時間目数学ね…、借りに行く時間ないから机寄せて

えへへ～ありがと～

「今日元気ないね」の代わりに

「もうちょっと、側に、いきたいな」の代わりに

「横顔、こうして見てるの好きだよ」の代わりに

時々嘘、ついて、

ごめんね結奈

終

Ōkujou no Yurireisan
Yuritopia no Tameni! 2
by あんかけてけ
@ankaketeke

文化祭初日
頼む！
ライブのプレッシャーに耐えかねた陽香に頼み込まれて、
話の流れから阿野も一緒に陽香のステージに上がることになった。
……コスプレで。
着せてみた！
書いた人 にんじん
ゴゴゴゴゴゴゴゴ

なんで
こんな格好…
ライブ衣装に
制服で並ぶのも
アレでしょ？
そりゃそうだけど
……って
何アンタだけ
仮面ぽいの
着けてるのよ！
かわれ！
おおい二人とも
もうすぐ出番！

まぁ一応
ライブはうまく
いったわけだけど

お疲れ様
結奈さん

おつかれー
よく似合ってたよー

光の救世主(メシア)
衣装の元ネタ
知らなかったの？
何ソレ？
あら、いいじゃないですか
光の救世主(メシア)
そうそう
カッコいいわよ
光の救世主(メシア)
阿野オーーーー！
ダ
しばらくの間
変なあだ名が
つけられた。
また着て
見せてくださいね
着ません！

たこ焼
たこ
うーん
遅い
ソワ
ソワ
まだかな茉莉…
やっぱり一緒に来れば良かった…
うーん
ナンパとかされてないよね…心配
おーい！
ごめん遅れちゃった
お母さん張り切っちゃって
まつりはいつまでも
ガ

お待たせー

浴衣なんて何年ぶりかなぁ

ヤーヤー

…わぁ

ズル

わぁあああ茉莉可愛い～!!

ピピッ

パシャー

あはは…ありがとう

でもなんか

私らしくないかなー なんて…

ザク ザク

ううん…

すっごく似合ってる!

はー

ため息出るほど可愛いわ茉莉…

えっと〜…

なーんかいつになくくっついてくれてる気がするんだけど？

♪

いつもだったらこんなことしないはずなのに…

祭りのノリ…なのかなぁ

うん？

ピタッ

こ…こんばんわ

あ

ん！

ねぇ！結奈ちゃんが見てるよ！

！

ポヤ

ねぇ

え〜？

ねぇねぇ

今日の茉莉可愛いでしょ？

えっ

!?

え？

あはい

ん！

ニッ

！

……

スッ

おおぉ——！

可愛い——

うはー！

面白かったねぇ♪

ホント

やっぱり

あれは比奈ちゃんへの演技？

…少しはあったけど…

元は全部本心よ

だって茉莉はいつだって最高に可愛いもの

今だって…

ヒュルルルルルルル…

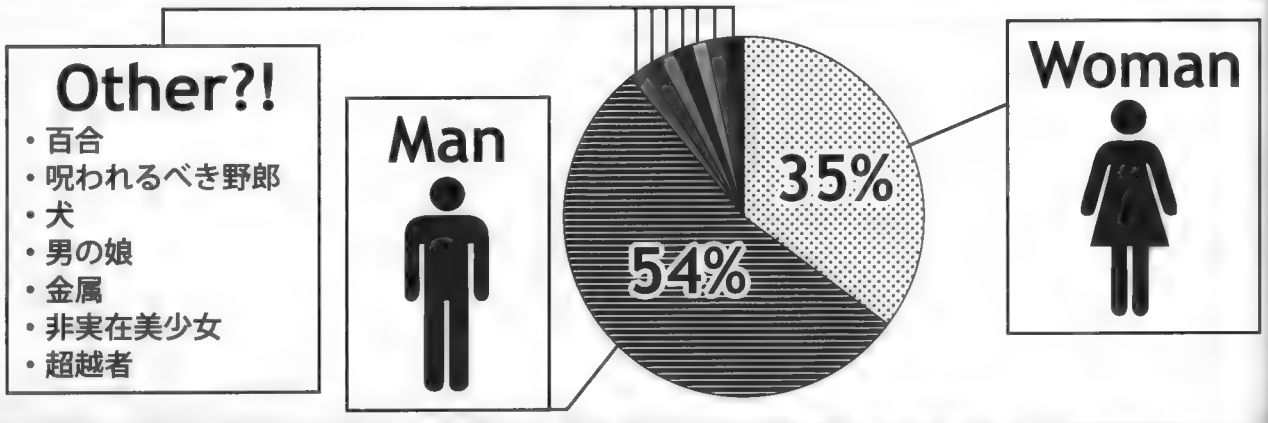
そして
これからも
いつまでも、ね

終

Web アンケート結果報告

2013年1月29日～3月30日までユリトピアのために2の告知サイトで募集していたアンケートの結果発表ページです。

Q1 あなたの性別は？



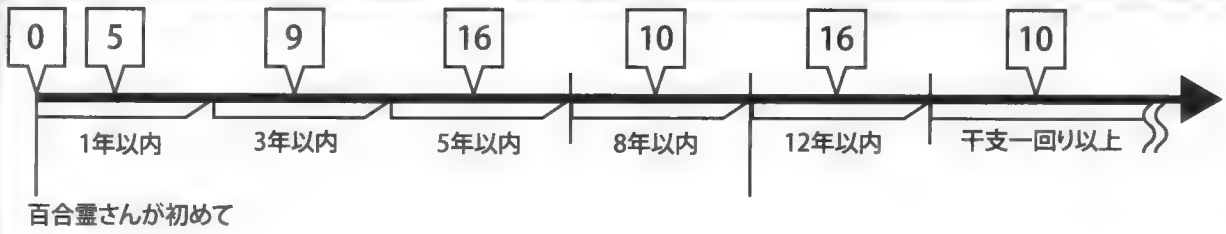
Q2 公式カップリング内であなたの好きなカップリングは誰ですか？

桐・月代	17pt	・教師と生徒、年上と年下、でも見かけは逆転、そんな、アンバランスだけど、想いは本気な二人が好きです。 ・社会人アフターストーリー所望！ ・桐ちゃんの変態かわいいところや駄々っ子っぷりや、告白時の勇敢さなどがお気に入りです。
沙紗・羽美	13pt	・初々しさも恥ずかしさも満載の見てて楽しいカップルで好きです。 ・「好きなんだ、羽美。好きって、言いたいんだ。」のセリフ、ギリギリの心情が伝わってきてもう！ ・沙紗が羽美に髪をいじられるシーンで KO されました。
結奈・比奈	10pt	・今までずっと親しくしてきたのに恋人になったとたんに、同じことをしていても全く違った表情を見せる幼馴染は最強。 ・お互いの存在があるからこそ、今の二人の性格や趣味、好きなものがあるんだなぁと感じられる程の関係が凄く好きです。
愛来・陽香	10pt	・クールな愛来がかわいい笑顔を見せたときに陽香が胸きゅんしてるのに気づかない、そんな愛来がかわいい。 ・どこまでも真っ直ぐな陽香ちゃんとそれを受け止める愛来さんがサイコーにロックで素晴らしい！！
牧・美紀	9pt	・キス CG がこの世のものとは思えない美しさ。 ・美紀さんのためにがんばる牧ちゃんと、それを嬉しそうに見守る美紀さんの図が特に好きです。
茉莉・美夕	4pt	・お互いの性格・特徴を理解し合い、任せるべきところは相手に任せるという二人のスタイルがとても頼もしく感じました！ ・同性愛を意識した上での互いの関係について考えているところが魅力的でした。
サチ・恵	1pt	・ふたりの間にまずジェネレーションギャップがあり、性格のギャップがあり、幽霊ということで色んな制約があるなかで、それでも笑顔を絶やさずに何十年も寄り添って過ごしてきた、素敵なカップルではないですか。結奈からみたら人生の大先輩なのに、友達のようでもあって。結ばれたら消えていくという、無常感と儚さも、併せ持っていて。生きて幸せを掴む姿を見てみたかった、という気持ちもあるけど、このふたりには、本編のような関係がやっぱりベストなのかなぁ、とも思います。
放送部	1pt	・沙紗さんのヘタレ攻め、羽美ちゃんの天然すぎない受け、その二人を見る音七さんの達観した感のバランスが素晴らしいので
全員	1pt	・可愛いから

Q3 公式カップリング以外で見たみたいカップリングは誰ですか？

阿野・結奈	21pt	・浮気ものでごめんなさい。でも見たいんです！ ・無理していちゃつけとは思わないけど二人は眺めてて飽きない。 ・友人達の恋模様に触れて、お互い意識し始めすとか凄く良いんじゃないかって思います！
阿野・音七	12pt	・お互いに相性が良さそうでにやにやできそう。 ・阿野ちゃんには、幸せになってもらいたい……。 音七さんにも、彼女にふさわしい相手が見つかればいいのに……。
結奈・音七	3pt	・互いになにをどうして欲しいのか解り合ってて、一緒にいても必要以上に干渉しないけど不意を突くように音七が積極的になりそうな感じがいいかなと。
サチ・結奈	3pt	・特典イラスト見てドキドキしてしまったから。 ・はじめて OP 見た時この二人がくっつくかと勘違いしてました。
愛来・結奈	2pt	・OL 百合みたいな感じになりそうなので。アダルティという意味では無く、大人っぽい関係性が見られそう。
阿野・桐	2pt	・阿野にちょっかい出す桐が見たいので。あとメガネコンビ。
結奈・恵	2pt	・結奈にとって一番気を許してる、素のままで居られる相手って恵じゃないかなと思います。
阿野中心 阿野総受け	2pt	・皆に弄られている阿野はとても可愛いと思います。
比奈・牧	1pt	・比奈と牧ちゃんの話はもっと読んでみたい。友情話でも、ノロケ話でも。
結奈・美紀	1pt	・年下の恋人を持つ同士でなんとかお互い談笑できるような仲になって欲しいな…なんて思います。 結奈ねえ、ダブルデート、しよう！
阿野・比奈	1pt	
月代・陽香	1pt	・本編では絡みが少なかったが、どちらも特徴豊かなキャラなので、意外と噛み合うのではないかと思う。
音七中心	1pt	
桐・牧	1pt	・牧ちゃんさんに「ふぉぉぉぉ」ってなる桐とか、どんな反応を見せるのかすごい気になりますね。
牧・マウント先輩	1pt	・牧ちゃんにマウントされて以来、牧ちゃんのことが忘れられない写真部先輩。 怯えながらも牧ちゃんに近づきたがる先輩が素敵です。
牧・陽香	1pt	・「先輩、ロックしてますね！」と陽香に迫られて、「い、いや、私もう彼女いるし…。だけど…」と揺れるのが見てみたいかも。
月代・恵	1pt	・このふたりのアナザーストーリーが（地味だけど）すごく好きなので。
阿野・音七・結奈の三角関係	1pt	・阿野が結奈に失恋して音七に押し倒されるストーリーがあっても・・・いいのよ？
茉莉・千佳	1pt	・網島先輩と千佳さんがおしゃべりしているところをみてみたいです。
新キャラ交えて	1pt	
体育教師・保険医	1pt	
ストマグ	1pt	
音七・玉地	1pt	・とあるＳＳを見て、すっごい素敵でした！
数学教師・月代	1pt	
アヤ・桐	1pt	

Q4 ユリトピアに足を踏み入れてどれくらい？（百合歴どれくらい？）



Q5 城女に入ったら何部/サークル/会に入りたい?

シロカワ会 8pt
・カワイイ子とカワイイ子がカワイイことしてるところを記録したい…!!

放送部 3pt
・一年生組含めてとにかく放送部のやり取りを生で見たい

美術部 2pt
・ヌードデッサンさせてもらえる相手を探している人になりたい

陸上部 1pt

弓道部 1pt
・武道館があるならその中に弓道場があるはず

薙刀部 1pt
・純粋にやってみたいのと、武道してる女子はかわいい!!

キラキラスポット部 1pt

数理部 5pt
・問題を作成するふりをしながら、桐と月代ちゃんのやりとりをにやにやしながら見守る。

天文部 3pt
・百合霊さんの物語の舞台は星がキレイに見えるところだと思うので

帰宅部 2pt
・男なので外野から応援する

軽音部 1pt
・それしかとりえがない……だけじゃなく、音楽系の女の子は面白い。

吹奏楽部 1pt
・サチさんや恵に曲を聴いてもらいたいです

演劇部 1pt
・(のスターの取り巻き)

新聞部 1pt
・横から眺めてたい

写真部 5pt
・合法的に恋人たちのツーショットを撮影し新聞部に提供して学校中の話題をかっさらってユリトピアに貢献したい

生徒会 3pt
・次期会長候補の牧ちゃんのお手伝いがし隊

オカルト研究会 1pt
・サチさんや恵と交信しようとする姿を見守られたい。

麻雀部 1pt

盆栽同好会 1pt

数理部の隣の部屋の部 1pt

昼寝部 1pt
・音七さんと一緒に寝たいです。

すべての部活 1pt
・好みの百合香がしそうなところにいく

料理部 料理研究会 4pt
・結奈さん一緒じゃなくても…たまに手伝ってもらえたりしたら嬉シス。

漫研 2pt
・阿野ちゃんと一緒に

図書委員 1pt
・本の虫になりたいのです。城女の図書室とか雰囲気も良さそう

風紀委員会 1pt
・愛来さんにびしばし鍛えられながら、遅刻寸前の学生達を焦らせたい

整備委員 1pt
・お城の白壁を塗ってみたい

結奈先生のお料理教室 1pt

男なので入らない 4pt

Q6 屋上の百合霊さん以外で、一番好きな百合作品は?

サフィズムの舷窓	5
青い花	5
マリア様がみてる	4
アカイイト	3
カタハネ	3
GIRL FRIENDS	3
ストライクウィッチーズ	3
白衣性恋愛症候群	2
その花びらにくちづけを	2
アトラク=ナクア	2
dolce	2
咲 -saki-	2
あさがおと加瀬さん	2
Strawberry Panic	2
きもちのかたち	2
Candy Boy	2
処女宮	1
ひだまりスケッチ	1
瑠璃色の夢	1
はやて×ブレード	1
彼女とカメラと彼女と季節	1
ひみつの階段	1
飴色紅茶館歓談	1
東方project	1
共鳴するエコー	1
メルルのアトリエ	1
神無月の巫女	1
カレイドスター	1
くの一夜伽話 この印籠が目に入らぬか?	1
フェルミオン ～未来からの訪問者～	1
少女セクト	1
星川銀座四丁目	1
バニラ A sweet partner	1

リスイユウキ	Circle：チラリチョチョ URL：http://cho2.piyo.to/ck/
illustration	

アンソロジー発行おめでとうございます。
百合霊さんの発売から1年経ちましたが（あっという間ですね…）
まだまだ盛り上がっていくと良いなと思います！ユリトピア！

ユリトピアのために！2　ユリトピアのために！2

相葉式	Circle：東北の百合霊さん URL：http://www.pixiv.net/member.php?id=33939
comic	

ユリトピアのために！2開催、そしてアンソロ発行おめでとうございます。この素晴らしい機会、プレイ当初の気持ちを思い出し放送部の友情を描いてみました。百合霊さんのさらなる発展を願いつつ…！ありがとうございました。相葉式でした。

御厨みくり	Circle：みくりや。 URL：http://mikuri-ya.seesaa.net/
novel	

素敵なアンソロジーに、今回参加させて頂きました、御厨みくりと申します。今回、何分時間が取れなくて……大量の仕事に追われる中の執筆となりました。あと仙台オフの時に教美紗弓退したと言いましたが嘘です！また機会があれば参加させて頂きたいです。ありがとうございました！

サファイ	Circle：sacrifice URL：http://safai117.blog47.fc2.com/
illustration	

ユリトピアアンソロにお誘い頂きありがとうございます！やっぱり百合霊さんといったらさちめぐですよね！大好きです！もっともっとこの2人の絵や小説が増えますように☆ミ　よし。つくきりー！好きだー！愛してるーー！！

ユリトピアのために！2　ユリトピアのために！2

やまだ（仮）	Circle：YAMAGIRL
comic	

貴重なアンソロ参加の機会を設けて頂きありがとうございました。
うみささがすきです。

人間無骨	URL：https://twitter.com/ZephyrMusician
novel	

皆様に交じって、このアンソロジーに参加できたことを本当にうれしく思います。百合と聞いて何気なく買った屋上の百合霊さんのお陰で、様々な繋がりや面白い経験を得ることが出来ました。今までも、そして、これから先も、ユリトピアのために！！百合のために！！

哲仁	Circle：今週の落ち度 URL：https://twitter.com/tetuhito
illustration	

初めまして、哲仁ともうします。つくきり、いいですよね…
ちっちゃい年上とおおきな年下カプ好きなのでつくきりにはニヤニヤ
しっぱなしでした…これからの二人が楽しみですねえ…

はろはろ	
illustration	

この度は素敵な企画に参加させていただきありがとうございます。屋上の百合霊さんが公式、二次創作とさらに盛り上がることを楽しみにしています。

北条KOZ	Circle：UKOZ URL：http://pinterest.com/nwxp/
comic	

ユリトピアのために！2開催おめでとうございます。北条KOZと申します。結奈、阿野ちゃん、サチ恵が好きです。なのに、変なサチさんになってしまってスミマセン。参加させていただきありがとうございました。

眼鏡太一	Circle：太一の館 URL：http://plaza.rakuten.co.jp/ganntetutaiti/
novel	

今回はアンソロジーに参加させていただきましてありがとうございます。どこ読んでも百合霊さん本ですよ！　そういえば最近ユリトピアが体になじみ過ぎてユートピアという単語が一瞬誤字に見えるようになりました。

椎名かじん	Circle：馬鹿星人 URL：http://www12.plala.or.jp/koka/
comic	

阿野結奈が好きで、音七さんも好きで、でも続編があるなら三角関係とかも見てみたいな～といった欲望を垂れ流ししてしまいました。

ユリトピアのために！2　ユリトピアのために！2

九日	Circle：Day9 URL：http://www.pixiv.net/member.php?id=213393
comic	

「ユリトピアのために！2」アンソロジーに参加させていただきありがとうございました。百合霊さん発売から1年以上経ちますが、これからも今回のイベントのように百合霊さんの盛り上がりが続いてほしいです。「ユリトピアのために！3」の開催や公式の展開が楽しみですね。

セフ	Circle：筋肉ステータス
illustration	

アンソロ発行おめでとうございます！！
微力ながら参加させていただきました！！
もっと、もっとふえろユリトピア！

アティス	Circle：落書きピエロ URL：http://www.pixiv.net/member.php?id=53101
comic	

音七の生脚は不埒なガイスト。
※ 性的な表現となるため漫画ではカットされています

ユリトピアのために！2　ユリトピアのために！2

千歳	
novel	

『屋上の百合霊さん』が発売されて早一年！
おめでとうございます！アンソロ参加できてよかったです！
ありがとうございます！まだまだ目指せユリトピア！　ふおおおお！

みちよん	Circle：ほっぺ食堂 URL：http://omochiomochi.ldblog.jp/
illustration	

はじめまして、みちよんと申します。百合霊さんをいち百合好きとして楽しませていただいております。みんなかわいいので誰を描こうか迷いました。今後は他の子たちも描いていきたい所存です！！また機会がありましたらよろしくお願いします。

ユリトピアのために！2

DS	Circle：N.D.S.L. URL：http://www.pixiv.net/member.php?id=226568
comic	

待ちに待った百合霊さんアンソロジー発行おめでとうございます！ 主催者と執筆者のみなさまお疲れ様でした！ いっぱい描かせて頂いて幸せです。今から完成が楽しみ～引き続き勇者仲間押し（´▽`）

ユリカモメ（仮）	Circle：東北の百合霊さん URL：http://www.pixiv.net/member.php?id=4498665
novel	

自称ユリトピア東北支部のユリカモメ（仮）です。大好きな放送部＋阿野ちゃんのお話を書かせていただきました。沙紗羽美は青春！ 発売から一年以上経った今も百合霊さんの今後の展開を信じて盛り上がる毎日です。めざせユリトピア！

悠季	Circle：悠季楼 URL：http://www.geocities.co.jp/Bookend-Yasunari/7513/
comic	

はじめまして、悠季です。1Pのみですが4コマを描かせて頂きました。嘘と言えば4月1日。コーラの味が気になるサチさんならきっとサスケの味も気になるだろうとこんなネタに。それにしても気づけば二人してノリノリに…。

ユリトピアのために！2

佳賀梨夏琉	URL：http://www.pixiv.net/member.php?id=129212
novel	

初めまして。佳賀梨夏琉と申します。アンソロ参加とか初めてなのでキンチョーしましたが楽しかったです！テンションだけで突っ走りα切1週間前に出せたのは奇跡のような…（笑）。何はともあれ、ありがとうございました。

環月紙袋	Circle：紙袋Ｗｏｒｋｓ URL：http://kamibukuro01.blogspot.jp/
comic	

ユリトピアアゲイン！プチフェス開催&アンソロ発行おめでとうございます。
そしてありがとうございます！
ユリトピアを目指す全ての仲間たちに幸多かれ！

橘	URL：http://www.pixiv.net/member.php?id=1299818
novel	

「ユリレイサン　スキ？」「あ、はい」「ダレガスキ？」「強いて言えば、桐ちゃん？」「スゴ～イ。ナンデスキ？」「見た目キツそうなのに、」「ドウモ　アリガトウ～」百合霊さんもいいけど、モヤさまも面白いよね？

都塚　ムラサキ	Circle：としょかんのじかん URL：http://alibrarytime.web.fc2.com/
comic	

初めまして、都塚ムラサキです。この度は４コマ漫画を描かせていただきました。屋上の百合霊さんと出合って約１年が経ちましたが、いまだに好きです。これからも好きです。多分来年も同じ事言ってます。では、ありがとうございました！

みずぐちさとこ	Circle：CHRISTMAS GARDEN URL：http://ameblo.jp/clubhousecompany/
illustration	

「屋上の百合霊さん」アンソロ発行おめでとうございます！
皆さんの百合霊さんへの熱い想いが溢れた作品を楽しみにしています！
これからも盛り上がるといいですね！　私も頑張らないと…

九夏	Circle：夏の九十日間 URL：http://natsunokyuuka.blog.fc2.com/
novel	

こんにちは九夏と申します。今回のアンソロに参加出来嬉しいです、百合霊さん１周年（過ぎ）おめでとう！素敵な作品と結奈比奈に出会えて幸せな限り！これからも末永く続け、ユリトピア！ありがとうございました。

れおなるど	Circle：超10GB URL：https://twitter.com/eru_no_ji
illustration	

はじめまして、れおなるどと申します。今回は九夏さんのSSの挿絵としてぬるっと参加させていただきました。大好きな結奈比奈のお話に絵をつける事ができて幸せです。結奈比奈好きだー！！

西UKO	Circle：UKOZ URL：http://pinterest.com/nwxp/
comic	

「ユリトピアのために！2」開催&記念アンソロジー発行おめでとうございます。百合霊さん大好きです。

あんかけ　てけ	Circle：半固形情操論 URL：http://www.pixiv.net/member.php?id=6580273
illustration	

この度は参加させていただきありがとうございました！
ユリトピア3も開催されるよう願っております！
音七阿野を諦めない

にんじん	
comic	

寄稿させていただきましたにんじんです。主人公の名前やら髪型で安直に考えたネタでありますが、なにせ元ネタとしては古いのでわからん人のほうが多いかも。それでも読んだ人が楽しんでいただけたら幸いです、ハイ。

ガスリー	Circle：南船北馬 URL：http://www.pixiv.net/member.php?id=435923
comic	

ガスリーと申します、素敵な企画にお招きいただき感謝感謝雨アラレです…。
そして皆様も陸上部夫婦を、描こう！愛でよう！見守ろう！
ありがとうございました。

K子	Circle：満天星の乙女準備会 URL：http://yrtp.info/
editing	

アンケート結果報告ページと表紙ロゴデザインを担当させて戴きました。
アンケート結果報告ページにつきましては予想以上の反応を戴き、紙面に収まりきれない程の愛が詰まったページになりました。ぜひご覧ください。

觸鱠者	Circle：満天星の乙女準備会 URL：http://yrtp.info/
editing	

「ユリトピアのために！2」運営と本アンソロジーの編集をさせて頂きました。
プチオンリー1回目から開催もっと盛り上がるといいなと試行錯誤をしまして、30のサークル様と、31名のアンソロジー執筆者・編集様にご参加・ご協力に頂き、本当にたくさんの方と百合霊さん話をしたり、ファン交流ができて幸せです！
改めまして、参加して下さった方・プチオンリーや本を楽しみにして下さった方、本当にありがとうございました！　発売から一年以上が経ちましたが、屋上の百合霊さんという作品が、もっともっと盛り上がったり、FDが出ちゃったり、二次創作も増えたりすると嬉しいなと思います（あくまで願望です）。
今後とも何かありましたらよろしくお願い致します、ありがとうございました！

奥付

誌名：めざせ、ユリトピア！
発行日：2013年05月26日
発行：満天星の乙女準備会
Mail：yuritopia@yrtp.info
HP：http://yrtp.info
Twitter：@mantenboshi9
印刷：株式会社 緑陽社

無断転載・複製・アップロードなどはご遠慮下さい

GirlsLoveFestival9内プチフェスイベント

ユリトピアのために！2

開催記念アンソロジー

執筆者一覧（50音順）

相葉式	ＤＳ
アティス	哲仁
あんかけ　てけ	西ＵＫＯ
都塚　ムラサキ	人間無骨
佳賀梨夏琉	にんじん
ガスリー	はろはろ
環月紙袋	北条ＫＯＺ
眼鉄太一	御厨みくり
九夏	みずぐちさとこ
九日	みちよん
サファイ	やまだ（仮）
椎名かじん	悠季
セフ	ユリカモメ（仮）
橘	リスイユウキ
千歳	れおなるど